

＜アルカーイダ系組織＞

1. アルカーイダ

アルカーイダ（アラビア語: القاعدة、翻字: al-qā'idah、英語: Al-Qaeda）は、イスラム主義を標榜するスンナ派ムスリムを主体とした国際的なネットワーク、思想、運動。

(イ)概要

アラビア語で「アル (ال, al)」は、定冠詞、「カーイダ (قاعدة, qā'idah)」は「座る」を意味する動詞「カアダ (قعد, qa'ada)」の派生名詞で「大本」、すなわち「基地・基盤・座」を意味する。

アルカーイダの精神的指導者は「ビン＝ラーディン」であり、財力を用いて初期の反米闘争の組織を起ち上げた。アルカーイダのナンバー2とされていたアイマン・ザワヒリーはイスラム神学者。1986年、二人はサウジアラビアのジッダで初めて会ったとされる。組織作りや資金集め、組織の代表として声明などを出す役割はビン＝ラーディンが担い、テロに関する宗教的な理論面や作戦面は、学識のあるザワヒリーが担っていたとされる。2011年5月にビン＝ラーディンがアメリカ軍によって殺害されると、翌6月、アルカーイダは、ザワヒリーが新たな指導者に選出されたと発表した。

アルカーイダの実態についてははっきりしないことが多く、現在では、アルカーイダが一つのまとまった組織として存在しているかどうかは議論が分かれている。CIAの元工作員でイスラム主義組織の専門家であるマーク・セイジマン (Marc Sageman) は、アルカーイダとは軍隊のような明確な階級が存在する指揮命令系統を有する組織ではなく、人々が自発的に集合する社会運動のようなものであって、明瞭な境界や構成員が存在せず、特に2001年の米軍によるアフガニスタン侵攻以降についてはビン＝ラーディンの指揮によるものではなく、地域ごとに自発的に集まった人々によってアルカーイダの名の下に勝手にテロが行われていると指摘した。また、軍事力は明確なターゲットに対しては有効であるが、米軍と同盟国によってそれらが破壊され組織が拡散してしまった現在では、軍事力の行使とは異なる対策、すなわち人々が暴力的なテロ運動に参加することを阻止する必要があると指摘した。

(ロ)起源

アルカーイダの起源は、米国中央情報局 (CIA) とパキスタン軍統合情報局 (ISI) が1979年以降のソビエト連邦によるアフガニスタン侵攻に対抗させるために、サイクロン作戦の名の下でムジャヒディーン (イスラム義勇兵) を訓練・育成し武装化させたことに始まる。

(1980年代)

1984年、アフガニスタンでのアラブ人ムジャヒディーンを理論的に指導してきたムスリム同胞団のアブドゥッラー・アッザームが教え子のビン＝ラーディンをパキスタンのペシャーワールに呼び入れ、アラブ諸国からアフガニスタンへ義勇兵を送り込む組織マクタブ・

アル＝ヒダマト（MAK）を結成した。この動きにイスラム集団の精神的指導者であるオマル・アブドゥル＝ラフマーンやジハード団指導者のアイマン・ザワヒリーなどが合同し、35000人のムジャヒディーンが世界各地からアフガニスタンに集まった。MAKは、ペシャールにゲストハウスを設けアフガニスタンのジャラーラーバードなどに軍事訓練キャンプを建設し、ゲリラ戦を主体としてソ連軍と戦った。富豪であったビン＝ラーディンは、CIAやサウジアラビア政府と共にMAKの運営やムジャヒディーンによる対ソ連戦の資金元となった。

ソ連軍のアフガニスタンからの撤退後、闘争の舞台をイスラエルやカシミール、コソボ、アルジェリアなど世界各地の紛争地に求めるムジャヒディーンが中心となって1988年にアル＝カーイダを組織した。ここにおいてアブドゥッラー・アッザームはソ連軍撤退後に勃発したアフガニスタン内戦を最優先するのに対し、経済的な側面での実力者であった弟子のビン＝ラーディンは世界各地でのテロ作戦を主張し両者の路線対立が表面化した。1989年にアブドゥッラー・アッザームは何者かに爆殺されMAK体制は崩壊し、アルカーイダのメンバーはビン＝ラーディンの傘下となった。ビン＝ラーディンはアラブの英雄としてサウジアラビアに帰国した。

（1990年代）

1991年に湾岸戦争が勃発し、イスラムの2大聖地であるメッカとマディーナを領有するサウジアラビアが米軍を常駐させたことが、当時サウジアラビアに帰国していたビン＝ラーディンやアラブ諸国のムジャヒディーン達の反米意識を高めさせた。

1992年、宗教指導者で民族イスラム戦線のハッサン・アル＝トゥラビの招きでビン＝ラーディンは密かにサウジアラビアを抜け出しスーダンに移った。スーダンではオマル・アル＝バシールのクーデターが成功、ビン＝ラーディンはスーダン滞在中に建設事業などを進める一方でアイマン・ザワヒリーなどと組織を強化した。しかしテロを続けるアルカーイダはスーダンの厄介者となり、1995年にアイマン・ザワヒリーはスーダンを離れ世界各地を転々とし、ビン＝ラーディンは1996年にアフガニスタンに拠点を移した。

（1990年代）

1990年代に始まったアルカーイダの闘争は、年を追って過激になった。1993年には、思想的指導者となったオマル・アブドゥル＝ラフマーンや幹部のハリド・シェイク・モハメド、実行犯ラムジ・ユセフらがニューヨークの世界貿易センタービル爆破事件を引き起こした。1995年には、ビン＝ラーディンの資金提供元にハリド・シェイク・モハメドが起案しラムジ・ユセフが実行する予定だったアジア各国空港発米国行き旅客機の同時爆破を狙ったボジンカ計画が発覚している。また、これに続く計画では小型航空機をシアーズタワーや米国議会議事堂、ホワイトハウスやCIA本部などに突入させる計画もされており、これらの計画が米国同時多発テロ事件の原案になっているとされる。

1996年には、在サウジアラビア米軍基地爆破事件を引き起こした。1998年には、在ケニアと在タンザニアの米国大使館爆破事件を引き起こし、アフガニスタンのタリバン政権は

同年 12 月に採択された国際連合安全保障理事会決議 1214 で匿っているテロリストを国際司法機関へ引き渡すよう求められ、1999 年の安保理決議 1267 において、初めてビン＝ラーディンとアルカーイダを名指ししてテロ実行犯の引き渡しが求められた。

(2000 年代)

2000 年には、イエメン沖の米艦コール襲撃事件を引き起こし、同年の安保理決議 1333[10]でも再度タリバン政権に対してビン＝ラーディンとアルカーイダを名指してテロ実行犯の引き渡しが求められた。しかしタリバン政権は、これらの決議に応じなかったため経済制裁を受けた。

2001 年にハリド・シェイク・モハメド起案による米国同時多発テロ事件を引き起こした。これに対して同年 10 月に米国を中心とした有志連合諸国と北部同盟が不朽の自由作戦を発動し、ビン＝ラーディンとアルカーイダ勢力を匿うタリバン政権への軍事攻撃を始めたことにより、アフガニスタン紛争が開始された。同年 12 月にタリバン政権は打倒され、ハーミド・カルザイ暫定政権が発足した。これによりアルカーイダは資金的・人力的に打撃を受けたとされ、これ以降アルカーイダは個々の組織に分離しそれぞれが活動を行っているとされている。また、2002 年の国際連合安全保障理事会決議 1390 で、ビン＝ラーディンとアルカーイダ関係者とタリバン幹部らの資産凍結が決定されている。

アフガニスタン紛争勃発以後、ビン＝ラーディンとアイマン・ザワヒリーは、アフガニスタンとパキスタンの国境線（デュアランド・ライン）付近のパキスタン側のカイバル・パクトゥンクワ州や、パキスタン政府の実効支配が限定的にしか及ばない連邦直轄部族地域付近を逃亡中であると考えられていたことから、米軍はアフガニスタン新政権樹立後も、ビン＝ラーディンやアイマン・ザワヒリーを捕獲しタリバンやアル＝カーイダ残党、現地武装勢力を掃討するとの名目で、不朽の自由作戦を継続した。この戦いは主に国境を挟んだパキスタン側の連邦直轄部族地域のワジリスタン地域で行われていることから、ワジリスタン紛争とも呼ばれている。

2010 年 5 月 21 日にはアルカーイダのナンバー 3 でアフガニスタンにおいてアルカーイダを指揮するサイド・アル＝マスリー（別名：ムスタファ・アブ・アル＝ヤジド）が、米軍の無人攻撃機により殺害された。

2011 年 5 月 2 日（米国現地時間 5 月 1 日）、「米軍の特殊部隊が、ビン＝ラーディンの潜伏先と見られていたイスラマバード北東のアボッターバードにある邸宅で、ビン＝ラーディンを殺害した」と、CNN が報道した。これに関して、オバマ米国大統領が CNN の報道直後に声明を発表しており、ビン＝ラーディンとされる遺体を米国当局が回収した事、及び DNA 鑑定の結果、遺体がビン＝ラーディンである事も判明したとされる。

2003 年末以降、イラク戦争後の米国・イギリスの占領統治下にあるイラクに、アルカーイダ系戦闘員が多数潜入・潜伏した。2004 年春以降、アルカーイダ系戦闘員は、米国人やその同盟国の民間人を標的とした数々の誘拐・殺害事件を実行した。2004 年 10 月には、その残忍さから世界中に悪名を轟かせているアブー＝ムスアブ・アッ＝ザルカーウィー率

いるアルカーイダ系のスンナ派武装組織である「イラクの聖戦アル＝カーイダ組織」が日本人青年殺害事件を引き起こした。同組織は構成員にイラク国外出身者のムジャヒディーンを多く含み、外国人の首を切断して殺害したり、イラク国内のシーア派住民を無差別に殺害するなどの極端に過激な闘争路線を取っていたことから、他のイラク国内の武装勢力としばしば対立した。

2006年10月には、イラクの聖戦アルカーイダ組織を中心とした5つのスンニ派武装組織が結集して、イラク中部を一時的に自国領土だと主張する過激派の統一機構である「イラク・イスラム国」を結成した。

2004年3月11日には、スペイン列車爆破事件が発生した。これに対してアルカーイダの欧州軍事報道官を名乗る「アブ・ハフス・アル・マスリ隊」がアメリカ同時多発テロを引き合いに出しながらスペイン軍のイラク駐留を十字軍に準えて犯行声明を出した。このテロ攻撃は総選挙の3日前に実行されたため選挙結果に決定的な影響を与えることになった。アルカーイダの思惑通り、元々反戦世論が強かったスペインでは事件直後からイラク政策における米国追従を続けてきた国民党のアスナール政権に対する国民の批判が殺到、イラク撤退を求める市民のデモが相次ぐことになった。またイラク駐留を推進するアスナール政権が事件発生直後からバスク祖国と自由（ETA）による犯行を示唆していたことにより、「イラク撤退を避けるためETA犯行説を捏造したのではないか」という国民の不信を招いた。これに乗じてイラクからの即時撤退を公約に掲げる野党のスペイン社会労働党は国民党を非難、劇的な逆転勝利による政権交代を成し遂げた。4月16日に首相に選出されたサパテロは直後に公約通りにイラクからの撤兵を決定、4月18日から5月までに撤退を完了させた。

2005年7月7日には、ロンドン同時爆破事件が発生し、「欧州の聖戦アルカーイダ組織」名でイラクとアフガニスタンからの各国軍の撤退を求める犯行声明が出された。後にこの犯行声明は信憑性が薄いとされたが、同年9月1日にアルカーイダが公式に犯行を認める声明を発表した。犯行は海外にいるアルカーイダ首謀者の計画によって進められ、イギリス国内のムスリムが実行したものと見られている。

2. タリバン

タリバン (طالبان、Tālibān) は、パキスタンとアフガニスタンで活動するイスラム主義運動。1996年から2001年11月頃までアフガニスタンの大部分を実効支配し、アフガニスタン・イスラム首長国（タリバン政権）を樹立した（国際的には一部国家を除いて承認されず）。タリバンの最高指導者はムハンマド・オマル。ただし2001年以降は正確な消息が不明である。

(イ)概要

タリバンは、ソビエト連邦のアフガニスタン侵攻（1979年～1988年）後の長年の内戦の中から生まれた武装勢力。パシュトゥン人の割合が多い。ソビエト連邦に支援されていた

共産主義政権を打倒したムジャヒディーンたちが内輪もめから再び戦闘を始め、アフガニスタンが無秩序、無法状態に陥っていた。そうした現状を憂えてイスラム教に基づき治安と秩序の回復のために立ち上がったのがタリバンの起源である[1]。パキスタンの強力な支援を受けて急激に勢力を拡大、カンダハールを拠点とし、北に軍を進め、首都カーブル、そして北部の主要都市マザーリシャリーフを制圧し、2001年9月の米国同時多発テロ事件のころまでに国土の大部分を支配するに至った。

「タリバン」という語はアラビア語で「学生」を意味する「ターリブ」(طالب)のパシュト語における複数形であり、イスラム神学校(マドラサ)で軍事的あるいは神学的に教育・訓練された生徒から構成される。タリバン構成員を数えるとき、一人なら単数形の「ターリブ」、二人以上なら複数形の「タリバン」が用いられる。

(ロ)歴史

(起源)

タリバン側の主張によると、ムハンマド・オマルが20人の同志とともに始めたものだとされている。またタリバン隊員がイスラム教の聖書「クルアーン」を学んだ場所は、国境付近の難民キャンプの教員が整っていないムハンマド・オマルの開いた神学校であった。この神学校出身者が、結集時のタリバン隊士になる。彼らが蜂起したきっかけはムジャヒディーン軍閥が二人の少女を誘拐したことへの抗議活動であった。彼らは無事少女たちを解放し、この出来事から地元住民らから正義の味方としてあつかわれた。

(発展期)

内戦が続くアフガニスタンにおいて、タリバンは1994年頃から台頭し始めた。彼らはマドラサと呼ばれるイスラム神学校の学生たちが中心であり、タリバンが快進撃を続け、軍閥を追い散らし、治安を安定させ秩序を回復するようになったので、住民たちは当初タリバンを歓迎した。当時、アフガン市民たちは、長年にわたる内戦とそれに伴う無法状態、軍閥たちによる暴行、略奪などにうんざりし、絶望感を抱いていたため、治安を回復するタリバンの活躍に期待した。しかしその後、タリバンがイスラム教の戒律を極端に厳格に適用し、服装の規制、音楽や写真の禁止、娯楽の禁止、女子の教育の禁止などを強制していくにしたがって、住民たちはタリバンに失望するようになった。

1998年にタリバンがマザーリシャリーフを制圧した際に、住民の大虐殺を行った。マザーリシャリーフはアフガニスタンの少数民族であるウズベク人やハザーラ人が大きな割合を占めるが、タリバンはそうした少数民族、特にハザーラ人を標的に虐殺を行った。これは、タリバンがパシュトゥン人からなり、パシュトゥン民族運動の性格を併せ持つことを示すエピソードとなったと指摘されている[3]。なお、この1998年の虐殺は、1997年5月にマザーリシャリーフで起こったタリバン兵大量殺害に対する報復であった[4]。

(外国との関係)

タリバンは、軍事面および資金面でパキスタン軍の諜報機関であるISI(パキスタン軍統合情報局)の支援を受けていた。パキスタン軍にとり、敵対するインドとの対抗上、アフ

ガニスタンに親パキスタン政権を据え、「戦略的な深み」を得ることは死活的な課題であった。そして「親パキスタン政権」とは、民族的にはアフガニスタンとパキスタンにまたがって存在するパシュトゥン人主体の政権であり、かつ、パシュトゥン民族独立運動につながることを阻止する必要から、イスラム主義を信奉する勢力でなければならなかったという。このためそうした要件を満たすタリバンがパキスタンの全面的な支援を得て支配地域を拡大していった。アフガニスタンにパキスタンの傀儡政権が成立することは、中央アジアにおける貿易やアフガニスタン経由のパイプラインを独占するという思惑、またインドとのカシミール紛争で利用するイスラム過激派をパキスタン国外で匿うという目論みにも好都合であった。

1997年にタリバン軍がマザーリシャリーフの攻略に失敗し、その主力を一举に喪失してからはISIはより直接的な関与を深めた。2000年の第二次タロカン攻略戦ではパキスタン正規軍の少なくとも二個旅団以上及び航空機パイロットがタリバン軍を偽装して戦闘加入したとされている。このため2000年12月にはアナン国連事務総長がパキスタンを非難する事態となった。

また、1990年代半ばにはサウジアラビアもパキスタンを通じてタリバンに資金援助を行っており、アフガニスタンの安定化に対するタリバンへの期待は高かった。

また、強力で安定的な政権は中央アジア安定化につながるとして、米奥の支持を得ていた時期もあった。当時のアメリカのユノカル社が中央アジアの石油・天然ガスをアフガニスタンを経由したパイプラインでインド洋に輸送することを計画していたが、これはロシアやイランを避けるルートを取っており、米国政府としては好都合であり、このパイプライン建設計画を支持した。このパイプライン計画実現のためにはアフガニスタンの安定が前提条件であり、米国はタリバンによるアフガニスタン支配に関心を示した。アメリカの議会関係者や国務省関係者が和平の仲介を行おうとしたが、和平は成立しなかった。

1996年9月にタリバンが首都カーブルを制圧し、ナジブラ元大統領を処刑した際、米国国務省の報道官はタリバンの行為を非難せず、むしろタリバンによる安定化への期待を示すなど米国政府のタリバン寄りの姿勢を示した。

タリバンによる首都カーブル制圧後、タリバンによる人権侵害、特に女性の扱いに世界が注目するようになり、米国もタリバンへの姿勢を変化させていった。1997年11月にはオルブライト国務長官がタリバンの人権侵害を批判し、米国のタリバンへの反対姿勢を明確にした。1998年8月にケニアとタンザニアの米国大使館爆破テロ事件が発生すると、米国は人権問題以上にテロの観点からタリバンへの敵対姿勢を強めていった。

1999年12月、カシミールの独立を目指すイスラム過激派によりインド航空機がハイジャックされ、アフガニスタンのタリバンの本拠地だったカンダハルで着陸し、ハイジャックされた飛行機の乗客乗員155人を人質に立てこもる事件があった。その際に、ムタワツキル外相などタリバン政権幹部の仲介により、インド当局が獄中にあるイスラム過激派（カシミール独立派）の幹部3人を釈放する代わりに乗員155人が解放された。国際的に孤立

を深めるタリバン政権が、テロリストの釈放と引き換えにとはいえ、周辺国と連携して人質解放に尽力したことで、日本国内でも、国際社会もタリバン政権をイスラム原理主義勢力として単純に敵視するのではなく、歩み寄りを行ってもよいのではないかとする論調があった[11]。また、これにはイスラム過激派支援集団とみなされていたタリバン側の国際社会での汚名返上の思惑もあった。

(政権掌握)

タリバンは1996年9月に首都カーブルを制圧し、国連施設に幽閉されていた元大統領のムハンマド・ナジーブッラーを引きずりだして公開処刑として惨殺した。カーブル制圧後、「アフガニスタン・イスラム首長国」を建国したが、すぐにはどの国からも承認されなかった。1997年5月にタリバンが北部の主要都市マザーリシャリーフを制圧したのを受け、パキスタンが世界で初めて政府承認し、すぐにサウジアラビア、アラブ首長国連邦が続いた。この三か国以外からは承認されることはなかった。国際連合の代表権はブルハーヌッディーン・ラッバーニーを大統領とするアフガニスタン・イスラム国が保持しており、通称「北部同盟」として北部で抵抗を続けた。その後3年ほどでアフガニスタンの90%を支配下においた。

しかし、タリバンの支配はすべての音楽を禁止するなどイスラム主義に基づいた厳格なものであった。タリバンはパシュトゥン人の部族掟「パシュトゥンワリ」に従い、パシュトゥン人以外の民族の不満を招いた。このパシュトゥンワリは実際にはイスラム教のシャリーアの代表的解釈とは相容れない部分があるとも言われている。例えば、タリバンは殺人を犯した者に対しその犠牲者の遺族による公開処刑を行ったが、これはイスラム法に基づくというより、パシュトゥンワリに基づくものである[13]。

またアルカイダと接近してからは、その過激主義の影響を受け、パシュトゥンワリからも逸脱した、偏狭頑迷なイスラム解釈をアフガニスタン人に押し付けるようになった。このことにより、アフガニスタン国民からの支持は低下した。

(政策)

タリバンは過度に今までの娯楽や文化を否定し、また公開処刑を日常的に行うなど、過激な活動をおこなった。これは市民に対する見せしめであると同時に、娯楽の無い市民を巧妙に操る手口であり、多い時には1万人もの見物客が公開処刑に詰め掛けたといわれる。

また女性は学ぶ事も働く事も禁止され、外出さえも認められなかった。外国人も例外ではなく、女性の国連職員は入国が許可されなかった。彼らタリバンの統治メンバーらの服装は漆黒のターバンに黒と白のモノトーンの服装を組み合わせた独特のデザインでコーディネートされ、戦闘車両の多くもそれに準じた塗装が施されている。

(政権の孤立)

1996年、タリバン政権はビン＝ラーディンとアルカーイダの幹部を客人としてアフガニスタンへの滞在を許した。アルカーイダは、「対米宣戦布告」を行うなどそれまで引き起こされていた数々の反米テロの黒幕と推定されており、またイスラム諸国からも異端視され

ていた組織であり、タリバンは周辺諸国から孤立し始めた。

米国のクリントン大統領はタリバンに対する政策を転換し、ユノカルのパイプライン計画も破綻した。タリバン政権にアルカーイダを引き渡すように要求したが、タリバンは拒否した。アメリカはパキスタン政府に圧力を掛け、タリバンへの支援を断ち切ろうとした。またサウジアラビア政府もタリバンへの援助を打ち切ったため、タリバンは経済面でも大きな打撃を受けた。しかしタリバンは国内の他勢力の拠点を次々に攻略し、勢力を拡大し続けた。

1997年5月から、タリバンはアブドゥルラシード・ドーストム派の拠点であったマザーリシャリーフを攻撃したが撃退され、2500人以上の壊滅的な損害を出した。しかしタリバンはパキスタン軍の支援を受けて立ち直った。

1998年8月7日、タンザニアとケニアにあった米国大使館が爆破される事件が起きた。この攻撃をうけてアメリカは報復としてスーダンのハルツームにあった化学工場と、アフガニスタン国内のアルカーイダの訓練キャンプをトマホーク巡航ミサイルで攻撃した。

8月8日、タリバンはドスタム派の幹部を買収して勢力下に入れ、再度マザーリシャリーフを攻撃し、占領した。この際、5000人以上のハザーラ人市民が殺害され、イラン総領事館の外交官10人とジャーナリストが殺害された。この攻撃はイランや国際社会から激しい非難を受け、一時は国境地帯にイラン軍が集結する事態となった。

1998年9月、サウジアラビアはアフガニスタン臨時代理大使の国外退去を求め、かつ、自国の在アフガニスタン臨時代理大使を召還させ、事実上タリバンと断交した。これはケニアとタンザニアのテロ事件の首謀者と見られたビン・ラディンの扱いをめぐる対立が原因であったといわれている。

1999年、国際連合安全保障理事会においてテロ行為の防止を目的とする国際連合安全保障理事会決議1267[15]が採択され、タリバン政権に対しビン＝ラディンとアルカーイダ幹部の引渡しを求め、実行されない場合には経済制裁が行われることになった。しかしタリバンはこれに従わず、経済制裁が行われることになった。

2000年10月、アル・カーイダは米国のミサイル駆逐艦コールに自爆テロ攻撃を行った(米艦コール襲撃事件)。このため米国はさらに経済制裁を強化することを主張し、12月には追加制裁を定めた国際連合安全保障理事会決議1333が採択された。

2001年2月26日、タリバン政権は、紛争続きのアフガニスタンにあつて、それまで徐々に壊れていたバーミヤーンにある石窟の仏陀の像(バーミヤン溪谷の文化的景観と古代遺跡群)を、タリバンが最終的に、木っ端微塵に吹き飛ばした。しかし、この行為に対しては非イスラム教諸国のみならず、イスラム教諸国に至るまで非難を行い、完全に逆効果となった。支持した者は、ごく少数にとどまった。イランの映画監督モフセン・マフマルバフは著書『アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない恥辱のあまり崩れ落ちたのだ』の中で、アフガニスタンで長年続いている人道的危機を無視し続けながら、大仏の破壊を大きくとりあげた欧米のメディアを批判した。

2001年9月11日、米国で同時多発テロ事件が発生すると、米国はこのテロの容疑者としてアルカーイダ関係者を引き渡すように要求した。しかしタリバン政権はこれを拒否したため、アメリカと有志連合諸国は国際連合安全保障理事会決議1368による自衛権の発動として攻撃を開始し、北部同盟も進撃を開始した。11月までにタリバンはカーブルとカンダハールを含むアフガニスタンの大半の領域を喪失した。

オマルをはじめとする指導部の多くは失われず、2003年以降アフガニスタン南部及びパキスタンのトライバルエリア、ワズィーリスタンを根拠地に勢力を回復し、2006年中にはアフガニスタン南部四州で都市部以外の支配権を獲得するに至ったと言われる。

これにはパキスタンの原理主義勢力、及びその背後のISIが深く関与しているとする向きが強く、同年末にはアフガニスタン暫定行政政府の大統領ハーミド・カルザイがパキスタンを名指しで非難する事態に至った。

国際部隊の治安活動もあり主要都市の陥落などの危機的状況には陥っていないが、国際部隊の展開地域等でケシ栽培を禁じられた、あるいは多国籍軍の攻撃で民間人が死亡したなどの理由により、とりわけパシュトゥン人の間などで、治安の混乱と経済的苦境からタリバン復活待望論が広まっているという。

一方、アフガニスタンから逃れてきたタリバンの影響を受け、パキスタン国内でも過激化した武装勢力（パキスタン・タリバン運動）が誕生した。パキスタン・タリバン運動はアフガニスタンのタリバンとは別物であり、米軍への攻撃に加え、米国を支援するパキスタン政府に対するジハードも目的としている。2007年12月には、タリバンを支持するパキスタン人の武装勢力を統合する目的で、パキスタン国内の13のタリバン系組織が合体してパキスタン・タリバン運動が発足した。発足時の最高指導者はバイトゥッラー・マフスード。パキスタン国内ではパキスタン・タリバン運動がアメリカ軍による最大の打倒目標になっている。

アフガニスタン南部ではタリバンが独自の知事や裁判所を設置して完全な支配下に置いている地域がある。ヴァルダク州ではタリバン独自の州知事、軍司令官、シャリーア法廷の設置やカーディー（シャリーア法廷の裁判長）を任命し、道路税などの税金の徴収、徴兵、学校の閉鎖やマドラサでの教育の強制、シャリーアに基づく刑罰の執行などを行い、完全にタリバンの統治下にある。ローガル州のバラキー・バラク地区はタリバンによる制圧後、床屋で髭を剃ることとテレビの視聴を禁じ、従わないものは「異教徒と外国人のスパイ」とみなすと住民に脅迫したという。ヘルマンド州の大部分も中央政府の支配が及ばず、タリバンの影響下にあり、地元部族長によれば住民も政府を頼りにするのではなく、タリバンの"政府"を頼り、90%の住民がカルザイ政権ではなくタリバンを支持しているとい

(ハ)関係略史

2006年12月、米軍はタリバンの軍事評議会議長であるムッラー・アフタール・ムハンマド・ウスマーニーをアフガニスタン南部で殺害したと発表。

2007年5月、同じく軍事司令官で、タリバン政権時代に建設相を務めたムッラー・ダ

ードウッラー・アフンドが戦闘で死亡。同年 12 月、タリバンのスポークスマンであるザビウッラー・ムジャーヒドは「ダードウッラー兄弟はタリバンの規約に反して活動していたため、運動から除名されていた」と関係を否定する声明を発表。

2008 年 2 月 11 日、パキスタン国軍は、同国南西部のバローチスタン州でダードウッラーの兄弟であるマンスール・ダードウッラーを拘束したと発表した。

同年 2 月 18 日、アフガニスタン駐留する NATO 傘下の国際治安支援部隊の発表によると、南部ヘルマンド州でタリバン同州指導者のムッラー・マティーンとムッラー・カリーム・アガーを殺害したと発表した。

同年 3 月 31 日、ヘルマンド州の州都ラシュカルガーにおける戦闘でタリバン現地指導者の一人、ムッラー・ナキーブッラーをアフガニスタン警察が拘束した。ナキーブッラーは過去 2 回拘束されているが、その都度に脱走していた。

同年 7 月 17 日、アフガニスタン駐留多国籍軍の発表によると、ヘルマンド州におけるタリバン指揮官、ビスマッラー・アフンドを 7 月 12 日に殺害したと発表した。

同年 8 月 22 日、アフガニスタン国防省報道官の声明によると、ヘラート州において地元の過激派と会合中だったタリバン現地指導者、ムッラー・シッディークをアフガン軍が殺害したと発表した。

同年 9 月 28 日、アフガン治安当局者は、ガズニー州にて、同州アングル地区のタリバン指導者アブドゥル＝ラヒーム・デーシューワラ 3 人が空爆で死亡したと発表した。

同年 11 月 23 日、NATO 傘下の多国籍軍の発表によると、ヘルマンド州において同月 19 日に同州におけるタリバン指導者、ムッラー・アサドを殺害したと発表した。アサドは、同州ガラムシール地区における攻撃の責任者とされる。

2009 年

同年 2 月 15 日、駐留米軍は、トルクメニスタンとの国境近くの民家に潜伏していたタリバン指導者、ムッラー・ダスタジルを殺害したと発表。ダスタジルは昨年 11 月にアフガニスタン軍兵士が死亡したゲリラ攻撃を指揮したとされる。ダスタジルは以前、テロ容疑で拘束されていたが、恩赦により出獄していた。

同年 6 月 23 日、ウルーズガーン州タリーン・コート近郊で起きた、タリバンとアフガン・ISAF 合同軍との戦闘で、同地域のタリバン指導者ムッラー・イスマーイールが死亡した。

同年 8 月 6 日、パキスタン・タリバン運動の最高指導者バイトウッラー・マフスードがアメリカの無人偵察機による空爆で死亡したとパキスタン情報当局が発表した。後任には弟のハキームッラー・マフスードが就任。

2010 年

同年 1 月 18 日、首都カーブル中心部でタリバンが政府施設や市場などを標的にした自爆や銃などによる攻撃を行った。治安当局と激しい銃撃戦となり、少なくとも一般市民の子ども 1 人を含む 5 人が死亡、71 人が負傷した。タリバン側は 7 人が死亡。

同年 2 月 16 日、ニューヨーク・タイムズが、タリバンの軍事評議会議長で、最高幹部の一

人であるムッラー・アブドゥル＝ガーニー・バラダールがパキスタン・カラチで拘束されたと報道。バラダールは、タリバン創設時からのメンバーで、ムハンマド・ウマルやビン＝ラディンとも近かった人物とされ、タリバン政権では、国防次官の地位にあった。

2011年

同年5月2日（米国現地時間5月1日）、CNNが「米軍の特殊部隊がイスラマバード郊外のアボタバードにある邸宅でビン＝ラディンを殺害した」と報道した。CNNの報道直後に米国大統領バラク・オバマは、米国当局がビン＝ラディンとされる遺体を回収し、DNA鑑定の結果遺体がビン＝ラディンであることが確認されたとの声明を発表した[25]。

2013年

同年6月18日、タリバンがカタールの首都ドーハに事務所を開設した。タリバンと米国政府の間で、和平協議が行われることが発表された。アフガニスタン政府は、当初、この和平交渉に参加する予定だったが、6月19日、ハーミド・カルザイ大統領が「事務所の開設の仕方とタリバンの声明は、米国がわれわれに保証していたことに明らかに反する」として、交渉がアフガン主導でなければ交渉に参加しないと表明した。

同年6月26日、米国は、タリバンとアフガニスタン政府との取りまとめができず、米国のアフガニスタン・パキスタン特別代表ジェームズ・ドビンズは、米国に帰国した。和平交渉の開始は仕切り直しの必要に迫られている。

同年7月9日、ドーハの連絡事務所の一時閉鎖を発表した。

2014年

同年6月20日-6月28日、ヘルマンド州州都ラシュカルガー北東部のサンギン（Sangin）地区にて、タリバンの部隊と政府軍が交戦。同地区は、タリバンの攻勢に圧され2010年にはイギリス軍部隊が撤収する難攻の地であったが、政府軍側が800人以上の戦闘員を投入して制圧。政府側は、6月28日に同地における事実上の勝利宣言を行った。政府側の発表では、政府側の死者28人、タリバン側の死者およそ260人。

（穏健派タリバン）

タリバンには、主にアブドゥル＝ワキール・アフマド・ムタワッキル元外相やアブドゥルサマド・ハクサル元内務次官らで構成されるいわゆる「穏健派タリバン」という勢力も存在する。彼らは武装闘争を放棄し、政治によってタリバンの掲げた理想の実現を図ろうと考えている。ハクサルやムタワッキルが中心となって潜伏している元メンバーや武装闘争を続ける仲間に投降を促すなどして、議会選挙参加を呼びかけた。アフガニスタン政府も同じパシュトゥン人であるカルザイ大統領がこの動きを歓迎して後押ししたが、かつてタリバンと戦った旧北部同盟勢力などが「タリバンの復権につながる」と猛反発した。また、タリバン自身も穏健派を裏切り者だとして暗殺をほのめかした。

2005年の議会選挙では、ムタワッキルやハクサルらは落選したものの、元タリバンの中でもムラー・アブドゥル・サラム・ロケッティ元司令官やムハンマド・イスラーム・ムハンマディ元バーミヤン州知事のように下院議員に当選した人物もいる。モハマディ議員は

2007年1月に、ハクサル元次官は2006年1月に暗殺された。このようにタリバンと袂を分かちカルザイ政権に協力することは容易ではない状況にある。

(パキスタンにおけるタリバンの戦闘)

アフガニスタンでは、麻薬の原料になるケシの栽培が伝統的に盛んだった。タリバンは、1997年終盤にケシ栽培を禁止したものの効力を得ず、2000年までには、アフガニスタン産のケシは、世界の75%に達した。2000年7月27日に再びケシ栽培禁止の法令を出し、国連の調査によれば、ナンガルハル州では12,600エーカーあったケシ畑がタリバンによって破壊され、17エーカー(以前の0.14%)にまで減少するなどした。

こうした幾度かの禁止令にも関わらず、タリバンは実際にはアヘン栽培を積極的に容認したものと考えられている。2001年の国連麻薬取り締まり計画や1999年のウズベキスタンやタジキスタンの報告によれば、タリバンの支配地域が広がるにつれ周辺諸国への密輸量は跳ね上がり、隣国のパキスタンでは1979年に皆無だった麻薬中毒者が1999年には500万人に達した。イランでは同時期120万人のアヘン中毒患者が報告された。

アフガニスタンを根源にする麻薬汚染の拡大に国際的な非難が相次ぐ中、タリバンは、麻薬使用への死刑適用、生産地でのケシ栽培の取り締まり等、麻薬を取り締まるかのような姿勢を演出した。

しかしながら、生産量を減らしたとはいえヘロインはタリバンが支配するただひとつの工場のみで生産が継続され、またケシ栽培の削減開始後も2,800トンに上るアヘン在庫は維持され、出荷が停止することはなかった。このため2000年12月の安全保障理事会決議1333では、タリバン政権にアヘン製造を禁止する要請が出されている。

麻薬追放・減産の形を取りながら、生産や輸出そのものの停止には至らず、むしろ麻薬類の国家管理が厳格化されたことを如実に示すこれらの事実により、タリバンによる2000年の麻薬禁止令は、実質としては当時供給過剰により下落傾向を見せていたアヘン相場に歯止めを掛けるための一時的な出荷停止措置であったと見られる。

この価格統制政策はタリバン政権が崩壊した事で崩れ、北部同盟の掌握地域では各軍閥が自派の資金源として、または貧農が生活のためにケシ栽培を再開するケースが続出した。この為に生産量は再び激増、GDPの50%に相当する産業となっている。これは2005年では全世界の87%に当たる生産量である。

アフガニスタン新政府はケシからの転作を進めており、2008年には前年に比べてケシ畑の耕作面積を19%減少させた。しかしアフガニスタンのケシ畑はタリバンの勢力が強いヘルマンド州に全体の3分の2が集中しており、タリバンの資金源となっていると見られている。またアヘン生産者が国内の混乱を継続させるためにタリバンに献金を行っているという指摘もある。

3. パキスタン・タリバン運動

パキスタン・タリバン運動 (ウルドゥー語: **پاکستان طالبان تحریک**, 英語: **Tehrik-i-Taliban**)

Pakistan,TTP) は、パキスタンの連邦直轄部族地域 (FATA) の南ワズィーリスターンを拠点にカイバル・パクトゥンクワ州などアフガニスタン国境地帯で活動するイスラム主義武装組織。ウルドゥー語の意味は「パキスタン学生運動」であるが、傘下に多くの武装集団 (兵力推計 35,000 人) を抱える。

(イ)概要

パキスタン人のほとんどのタリバンのメンバーを統合する目的で、2007 年 12 月にバイトゥッラー・マフスードを最高指導者としてパキスタン国内の 13 のタリバン系組織が合体して発足した。

シャリーアに基づくイスラム国家発足が目標でありパキスタン政府の打倒を掲げている。「パキスタン・タリバン運動」(TTP) はパキスタン軍統合情報局 (ISI) から直接支援されたアフガニスタンのタリバンとは直接の関係はないが、2008 年と 2009 年にムハンマド・オマルから「パキスタン国内での反政府活動よりアフガニスタンでの反米活動を支援して欲しい」との要請を受け、TTP 指導部はムハンマド・オマルやビン・ラーディンとの提携を進めた。これまでのところ、TTP の活動は主にパキスタン国内であるがクアリ・フセイン (Qari Hussain) は米国の都市を標的としていくと宣言した。2009 年にチャップマン基地自爆テロ事件などを起こしたのは TTP である。同年以降、パキスタン政府はワズィリスタン紛争で TTP への攻勢を強めている。

(ロ)歴史

TTP はアフガニスタン紛争 (2001 年-)が起こるとトライバルエリア (FATA) に逃げ込んだ非パキスタン人 (主にアラブ人や中央アジア出身者) に対して 2002 年にパキスタン軍が行った掃討作戦がルーツである。パキスタン軍のワズィーリスターン進攻はアルカーイダやアフガニスタンのタリバン掃討が目的であったが、ワズィーリスターンの部族勢力および武装勢力は共同で 2004 年に反政府の自治を進めた。

2006 年 10 月の米軍によるバージャウルのマドラサ攻撃が TTP 発足の契機になったとされる。

2007 年には TTP の存在が公表されると翌年、パキスタン政府は TTP を禁止し銀行口座を凍結した。

2008 年末から 2009 年にかけてムハンマド・オマルが TTP に使者を送りアフガニスタン国内に駐留する米軍への攻撃支援を要請すると、TTP の指導者であるバイトゥッラー・マフスード、ハーフィズ・グル・バハドゥル、マウルヴィ・ナジルの三者はそれに応え路線対立を停止し 2009 年 2 月に「統合ムジャーディーーン評議会」(SIM) を結成した。同年 8 月、米軍の空爆でバイトゥッラー・マフスードが爆死すると権力闘争が勃発、弟のハキームッラー・マフスードが後継者となっているとされる。新体制になって反政府の自爆テロが活発化している。特にシーア派、アフマディーヤ、スーフィーなどの民間人も自爆テロの標的となっている。

2010 年にアメリカは TTP を国際テロ組織に指定、2011 年にはイギリスもテロリスト集

団としてその活動を禁じた。

2012年10月、TTPから脅迫を受けながらも教育を受けられる権利を訴えていた15歳の女性、マララ・ユサフザイの殺害を企て、国内外から非難を浴びた。非難はイスラム主義者からもなされ、アフガニスタンの軍閥指導者グルブッディーン・ヘクマティヤールは、女子教育の必要性を指摘し、TTPの行動を「非道」と批判した。

2012年12月27日には、パキスタン北西部ペシャワールの検問所で、地元住民からなる民兵がパキスタン・タリバン運動の武装集団に襲撃され、23人が拉致される事件が発生。30日には、この23人のうち、21人の遺体が見つかるなど、衝突が続いている。

2013年6月23日、ナンガパルバット登山のためのベースキャンプ地を武装集団が襲撃、外国人登山客10人が死亡。パキスタン・タリバン運動が犯行声明を出す。

2013年10月11日、米国国務省は、米軍がパキスタンで行った軍事作戦で、TTP上級司令官であるラティーフ・メフスード (Latif Mehsud) を拘束したことを発表。同時に、2010年にニューヨークのタイムズスクエアで発生した爆破未遂事件へのTTPの関与を認めた。

2013年11月1日、最高指導者のハキームツラー・マフスードが米軍無人機の攻撃により死亡した[6]。同月7日、後継の指導者にマウラーナー・ファズルツラーが選ばれた。

2014年1月9日、パキスタンで最も勇敢な警官として知られたチョードリー・アスラム警視を遠隔操作の爆弾で暗殺した[8]。

2014年6月8日のカラチの国際空港襲撃事件ではウズベキスタン・イスラム運動と協力。

2014年6月、一部がパキスタン・タリバン運動を離脱し「ジャマートウル・アフラル」を結成して「イスラム国」への支持を表明。

2014年10月14日、パキスタン・タリバン運動の報道担当であるシャヒドウラ・シャヒド幹部名で同運動の有力幹部6名が「イスラム国」の傘下に入るとの声明を發出。同調者は約3割に達すると見られる。

4. アブ・サヤフ

アブ・サヤフ(アラビア語: *سيف أب و جماعة*, 翻字: j amā'at 'abū sayyāf, タガログ語: Grupong Abu Sayyaf, 英: Abu Sayyaf Group, ASG)は、フィリピンのイスラム主義組織。
(イ)概要

フィリピン南部のホロ島やバシラン島、ミンダナオ島のサンボアング半島などを拠点とする。フィリピン政府とアメリカ合衆国によってテロ組織に指定されている。

アブ・サヤフを設立したのはフィリピン人イスラム教徒のアブドラガク・ジャンジャラーニ (Abduragak Janjalani) である。ジャンジャラーニはシリアやサウジアラビアでイスラム神学を学び、その後、ソビエト連邦のアフガニスタン侵攻に対抗する為アフガンへ渡り、サウジアラビア人やアフガン人のムスリム組織「イスラム聖戦士」(ムジャヒディーン)がパキスタン国境付近に作った7つの武装組織の内、アフガン人のアブドゥル・ラスル・サイヤフが指導する組織に参加した。ムジャヒディーンには世界各国からイスラム教徒が

参加し、フィリピン南部からも数多く志願していたが、彼もその一人であった。ジャンジャラーニはそこでビン・ラーディンと会っている。

ムジャヒディーンはサウジアラビアの資金で運営され、CIA やパキスタン軍統合情報局 (ISI) が訓練を行っていたが、1989 年にソ連軍が全面撤収し、冷戦が終わると、ムジャヒディーンにはその後続いた内戦に参加する者もいたが、ジャンジャラーニは故郷であるフィリピンのバシラン州へ帰り、ミンダナオ島周辺のイスラム社会をキリスト教徒 (カトリック) 中心のフィリピンから独立させることを目的に武装組織を結成した。モロ民族解放戦線 (MNLF) からの過激な分派としてジャンジャラーニにはビン・ラーディンから設立資金が渡された、とされる。「アブ・サヤフ」はかつて共に戦ったアブドゥル・ラスル・サイヤフからとった名である。アブ・サヤフはアルカーイダのラムジ・ユセフなどから軍事援助を受けた。

アブ・サヤフはミンダナオ島でフィリピン警察や軍相手にゲリラ戦を行い、マレーシアやインドネシアでも活動を行うようになっていったが、1998 年にジャンジャラーニはフィリピン警察との銃撃戦で殺害される。精神的指導者を失ったアブ・サヤフは二つに分裂し、イスラム社会の独立運動より強盗や身代金目的の誘拐を繰り返す犯罪集団となり、絶頂期には 4000 人いた構成員も 2000 年頃には 100 人以下にまで減った。多くはモロ・イスラム解放戦線 (MILF) などに合流したと考えられる。

(ロ) 末期

2000 年中頃からフィリピンの大都市でテロが頻発するようになり、首都マニラでも高架鉄道の車両が爆破された。2000 年 4 月に、ボルネオ島近くのシパダン島 (マレー語版、英語版) で、外国人の観光客など 20 人を拉致する事件を起こした。もともと治安は良くなかったが、さらなる急激な治安悪化は社会不安を引き起こし、大統領ジョセフ・エストラダは失脚した。これらのテロは当初、共産主義勢力が起こしたのではないかとされたが、2001 年 1 月に就任したグロリア・アロヨは、アメリカ同時多発テロ事件以降、一連のテロはアブ・サヤフらイスラム系過激派の仕業として、米軍を巻き込んでミンダナオ島などで掃討作戦を行った。100 名以下 (50 名程とも言われる) までに勢力を落としていたアブ・サヤフは、この作戦でほとんど壊滅したと見られる。

2007 年 1 月、フィリピン国軍は最高指導者であるカダフィ・ジャンジャラーニが死亡したと発表した。他の幹部も死亡しており、弱体化が予想される。東南アジアのテロ組織ジェマ・イスラミアとの強い関連が指摘されている。

5. ジェマ・イスラミア

(イ) 概要

日本語ではジェマア・イスラミアなどとも表記される。「イスラームの会衆」という意味で、一般には略称の「JI」と表記される。「ダルル・イスラム」(DI) の活動家であったアブドゥラ・スンカル (Abdullah Sungkar) とアブ・バカル・バシール (Abu Bakar Ba'asyir)

によって両者の逃亡先であったマレーシアにおいて 1993 年に結成された組織で、タイ南部、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ブルネイ、フィリピン南部にわたるイスラム国家の樹立を目的としている。組織の精神的指導者はアブ・バカル・バシル（新聞等ではバシル師と表記されることが多い）。元アフガン義勇兵が中核メンバーである。2002 年に国際連合安全保障理事会決議でテロ組織に指定された。

(ロ)活動

(1990 年代)

ジェマ・イスラミアのルーツは 1942 年にインドネシアで生まれた「ダルル・イスラム」(DI、「イスラムの家」の意)という急進的な反植民地・イスラム主義組織である。DI はシャリーアにもとづくイスラム国家建国を目標とし、インドネシア独立戦争では西ジャワを拠点に戦い、1948 年のインドネシア共和国とオランダによるレンヴィル協定(英語版)を結んだが、この停戦協定を不服として西ジャワに独立国の建国を宣言した。1949 年にインドネシアが主権を獲得すると、DI との紛争が勃発、南スラウェシやアチェでも DI に合流する動きが起こった。DI は、創設者であるカルトスウィルヨ(英語版)が 1962 年に逮捕され銃殺刑に処されると表立った活動はなくなっていた。

Ji は公式には 1993 年 1 月 1 日にハドラーミーであるアブドゥラ・スンカルとアブ・バカル・バシルによって設立されたが、スハルト政権の弾圧で両名とも投獄され、釈放後はマレーシアを活動拠点とした(マレーシアでの活動は主にリクルートであり、2002 年以前には Ji の痕跡は余り見られない)。スハルトが死亡すると 1998 年に両名はインドネシアに帰還し、スンカルはアルカーイダとの関係を構築したが、1999 年に死亡した。バシル師はジハードを説いたが軍事行動には消極的であった。しかし、「ハンバリ」(Hambali)という通称で知られるリドゥアン・イサムディン(英語版)と出逢ったことでテロ活動に転じた。ハンバリは軍事部門の指導者となり、東南アジアにおけるウサーマ・ビン・ラーデインの代理のような存在となった。

(2000 年代)

Ji はまずモロッカ諸島やスラウェシ島のボソでの紛争に介入し、9.11 事件以降はインドネシア国内の西側の権益を攻撃対象としていった。9.11 事件の数ヶ月後、シンガポール政府が、同国内で連続爆弾テロを企てた容疑でイスラム過激派十数人を逮捕し、彼らの所属組織を Ji として公表し、その存在が公にされた。Ji はアル・カーイダやアブ・サヤフ、モロ・イスラム解放戦線、キリスト教徒からムスリムに改宗したフィリピン人たちの過激派であるラジャ・スレイマン運動(RSM)などとの軍事面・資金面での共闘関係が指摘されている。

2002 年 10 月 12 日のバリ島の爆弾テロ事件、2004 年 9 月 9 日のジャカルタ・オーストラリア大使館付近での爆弾テロ事件、2005 年 10 月 1 日のバリ島の爆弾テロ事件などが Ji の犯行であるとされている。ハリド・シェイク・モハメド逮捕後はアルカーイダでナンバー 3 の地位にあったハンバリは 2005 年に CIA とタイ警察によって逮捕され、その他の Ji

の幹部もインドネシア国家警察の対テロ特殊部隊 (Detachment 88) などに相次いで逮捕・射殺され組織は一時的に弱体化した。しかし、インドネシア警察当局は 2009 年 7 月 17 日にジャカルタで発生した JW マリオット・ホテルとリッツ・カールトン・ホテル連続爆破事件も、組織のさらなる弱体化を懸念したバシル師の穏健路線に不満を持つ強硬派の犯行とする見解を公表している。

2009 年 9 月 17 日、強硬派指導者であったヌルディン・トップが、Detachment 88 との銃撃戦で死亡した。ヌルディン・トップの上官であったパキスタン人のナシール・アッバス (Nasir Abbas) は武装路線の放棄を表明するに至った。

2010 年 8 月 9 日、インドネシア国家警察は、精神的指導者であったバシル師をテロ容疑で逮捕[3]。強硬派が同国北西部アチェ州内に設置した秘密軍事訓練キャンプなどを摘発した際、バシル師との関連を示す文書を、国家警察が押収したとしている。

6. アラビア半島のアルカーイダ

アラビア半島のアルカーイダ (アラビア語: *العرب جزيرة في القاعدة*、翻字: Al-Qaida fi Jazirat al-'Arab、英称: Al-Qaeda in the Arabian Peninsula、略称: AQAP) は、イエメンのサラフィー・ジハード主義組織。

(イ)概要

2009 年 1 月、アメリカ軍の攻撃とサウジアラビア政府の弾圧によりアルカーイダのサウジアラビア支部のメンバーがイエメンに活動拠点を移しイエメンのアルカーイダ支部のメンバーと合同して発足した武装組織である。イエメン国内に構成員を 500-600 人抱え、パキスタンとアフガニスタンを除くと最も有力な武装組織に成長している。またアルカーイダの主力はパキスタンからイエメンとソマリアに移動しているとされる。AQAP は反サウード家とイエメン共和国打倒を鮮明に打ち出している。ビン・ラーディンの父のムハンマド・ビン・ラーディンは、イエメンのハドラマウトの出身である。

(ロ)起源

2009 年 12 月のデルタ航空機爆破テロ未遂事件に関与したとされるナイジェリア国籍(ラゴス出身)のウマル・ファルーク・アブドゥルムタッラブ (英語版) (Umar Farouk Abdulmutallab) 容疑者やアメリカ出身のイスラム主義者・アンワル・アウラキも AQAP のメンバーだと判明している。特にアウラキは AQAP の急成長の影の立役者とされる[7]。米国のクリントン国務長官は同年 12 月、AQAP を「テロ組織」に指定、2010 年 8 月、『ワシントン・ポスト』は、CIA が AQAP をビン・ラーディンのアルカーイダ本体より危険視している、と報じた。CIA はイエメンの対 AQAP 作戦に RQ-1 プレデターを投入している。

(ハ)活動

2006 年 2 月、イエメンのサナアの刑務所に収容されていた 23 人のアルカーイダのメンバーが脱走に成功した。そのうちの 1 人、ナシル・アル=ウハイシ (Naser al-Wuhayshi) が AQAP のリーダーである。アルカーイダのアイマン・ザワーヒリーも AQAP はウハイシ

が指導していると認めている。ウハイシはかつてアフガニスタンでビン・ラーディンの秘書を勤めていた側近である。2001年にアフガニスタンを出国するとイラン当局に逮捕され、身柄をイエメンに引き渡され刑務所に収容されていた。同じく刑務所からの脱走組のカシム・アル＝ライミ (Qasim al-Raymi) が AQAP の軍事部門の最高責任者で、イエメン国内に軍事訓練キャンプを設立し民兵をリクルートしてきた。ライミは2010年1月、アリー・アブドゥラー・サーレハ政権の AQAP への空爆作戦で死亡したとされる。グアンタナモ湾収容キャンプでサウジアラビアが行っていた過激派再教育のためのカウンセリング・プログラムから姿をくらましたサイド・アリ・アル＝シフリ (Said Ali al-Shihri) が AQAP のナンバー2であった。シフリは2001年にパキスタンとアフガニスタン国境で逮捕されグアンタナモに収容されていた。シフリも2011年2月に空爆で死亡したとされる。イブラヒム・スレイマン・アル＝ルバヤシュ (Ibrahimj Sulayman Arbaysh) もグアンタナの元収容犯で、AQAP においてムフティーとなっている。AQAP はメンバーがイエメンの部族と婚姻を進めることでイエメン国内に拠点を構築していると言われている。2011年5月、AQAP はイエメン南部のアビヤン県の県都ジンジュバルを制圧したと報道された。

7. イスラム法廷会議

イスラム法廷会議 (“Islamic Courts Union, "ICU”、ソマリ語: Midowga Maxkamadaha Islaamiga、アラビア語: الإسلامية المحاكم اتحاد، Ittihād al-mahākim al-islāmiyya) は、ソマリアのイスラム法学者によるイスラム裁判所の連合体、ならびに付属する行政各事務所や警察部隊でつくる、1994年に結成された自治政府、およびその自治政府が治める地域の呼称。2006年にイスラム法廷連合から改称された。ここでは同政府によるモガディシオ制圧までの記述で「法廷連合」、その後の記述で「法廷会議」とする。

(イ)概要

(支配地域の急拡大)

幹部会議長はシェイフ・シャリーフ・シェイフ・アフマド (Sharif Ahmed) 、評議会議長はシェイフ・ハサン・ダーヒル・アウェイス (Hassan Dahir Aweys) 。1994年に結成されたイスラム法廷連合は、内戦によって崩壊した国内を、イスラム国家の樹立によって再統一することを目標に掲げ、各地に割拠する軍閥とその連合たるソマリア暫定連邦政府に対し、武力闘争を展開した。ソマリア北東部、プントランドのユスフ大統領率いる暫定政府は、法廷連合を「アルカーイダと関係のあるテロ組織」とするアメリカ合衆国の援助を受け、「平和の回復と反テロ同盟」を結成し抗戦したが、法廷連合は戦闘の勢いと清廉な行政によって軍閥支配を受けていた住民からの支持を取り付け、急速に勢力を拡大。2006年始めまでに幾度となく繰り返された両派の衝突は、同年5月の法廷連合による首都モガディシオ突入にまで激化し、2006年6月5日、法廷連合はモガディシオ制圧を宣言した。

(支配地域での活動)

法廷連合改め「イスラム法廷会議」は、内戦で荒廃していたモガディシオで大清掃運動

を呼びかけ、都市を瓦礫の山の状態から幾分元通りにした。しかし法廷会議の急進派はシャリーアを厳格に守るよう住民に強要するなど、過激なイスラム主義を実行した。その様子はアフガニスタンのタリバンに類似すると言われ、音楽や欧米系の映画の鑑賞、女性のサッカー観戦を禁ずるなどの政策を採り、公開処刑を行うなど、人権侵害を欧米や周辺各国から指摘された。一方、アラブ連盟やその加盟諸国は比較的これらの政策に寛容であった。

(攻防)

暫定政府は南西ソマリアの都市バイドアに撤退して抗戦を続けていたが、法廷会議軍はバイドアを包囲、暫定政府は同市とその付近のみに支配領域を狭められた。これに対しアメリカやアフリカ連合 (AU) は、法廷会議の行動はソマリア統一を妨害するものと認識する。すでに紛争は法廷会議をエリトリアが、暫定政府をエチオピアが支援する国際的なものとなっていた。

法廷会議はアフリカ連合軍の侵攻を防ぐためとして、2006年9月に南部の港湾都市キスマユを占領し、対立するケニアとの国境を封鎖した。エチオピア軍の支援を受けバイドアに立てこもる暫定政府側は、キスマユの奪還を宣言した。

(支配の瓦解)

2006年12月6日、国際連合安全保障理事会はソマリアへの国際平和維持部隊派遣を決定した。しかし、20日に法廷会議とエチオピア軍の間で起こった戦闘が激化。エチオピアは24日にこれまで認めていなかったソマリア派兵の事実を確認、同日ソマリアへの空爆を開始し、法廷会議との「戦争状態」を宣言した。28日にはエチオピア地上軍の侵攻を受け、法廷会議はモガディシオからキスマユに撤退、エチオピア側は戦闘で法廷会議側を約1000名殺害したと発表した。2007年1月1日には暫定政府軍とエチオピア軍がキスマユを攻撃すると、ほとんど抵抗することも無く、法廷会議は南部ケニア国境に敗走。暫定政府は北部のソマリランド自治区を除き、ソマリア全土を掌握したと宣言、また残党の掃討は継続するとした。

ケニアでは法廷会議民兵が拘束されるなど、結束力が失われた可能性も示唆されたが、モガディシオに潜伏する指導部は、年始早々に日本の朝日新聞による潜入取材に応じた(1月6日朝刊掲載)。それによると、戦闘激化は一部部隊の強行によるもので、会議内に混乱があったこと、2000人の兵士と100台の戦闘車両で応戦したが、戦闘機や戦車を持つエチオピア軍に歯が立たなかったことを公表した。また、兵士と武器のほとんどは温存されており、国民の不満が高まった頃合を見計らって、ゲリラ攻撃を仕掛けると発言している。(ポスト法廷会議)

1月5日から、法廷会議はラス・カンボニに駐留するエチオピア軍と暫定政府軍を攻撃したものの、航空攻撃など米軍の介入をうけ敗退し、その後構成員は地下に潜ることとなった。多くのメンバーは暫定政府高官の暗殺や軍補給部隊への攻撃、ロケット砲・迫撃砲などを使った一撃離脱戦法などで抵抗していたが、組織だった行動ができる少数のグループ

は、評議会議長アウエイスの舎弟ハシ・ファラーが幹部をつとめるイスラム過激派アル・シャバブへ合流する。一方、これまで法廷会議を支援していたエリトリアでは、9月になって構成員があらたにソマリア再解放同盟（ARS）を名乗り再出発した。

2008年8月には、暫定政府とソマリア再解放同盟が停戦協定を締結。しかしアウエイスら一部メンバーはこれに反発、最終的に再解放同盟は幹部会議長アフマドが率いる主流派（ジブチ派）と、アウエイスらの強硬派（エリトリア派）に分裂した。

2009年1月31日、ジブチでソマリア国会が開会され、ジブチ派のアフマドが大統領に選任された。これに対し、2008年末までにソマリア南部を支配下に置いたアル・シャバブなどいくつかのイスラム過激派は、アフマドと暫定政府への攻撃続行を宣言した。また、このころ再解放同盟エリトリア派など4派が連合し、新勢力ヒズブル・イスラムを形成している。

過激派グループは2009年に入ってからソマリア全土で暫定政府へのテロや攻撃を繰り返し、5月には部隊がモガディシオに肉迫。さらに6月20日には、大統領官邸が反政府勢力に包囲されたとしてアフマドが非常事態宣言を発令するなど、法廷会議なきあともソマリアの状況は予断を許さない。

8. アル・シャバブ

アル・シャバブ（アラビア語: الشباب, Al-Shabaab, Ash-Shabaab）は、ソマリア南部を中心に活動するイスラム武装勢力。2012年現在、ソマリアで最も有力なイスラム勢力であり、ソマリア南部で最も支配地域が広い勢力でもある。ソマリア暫定連邦政府とそれを支援するエチオピア、米国、アフリカ連合などと対立している。ソマリア南部の都市キスマヨを支配するヒズブル・イスラム、アルカーイダ、エリトリアなどと交流があるとされる。

「シャバーブ」は「若さ/青年」を意味する語で、ヒズブ（党）を付けてヒズブル・シャバーブ（Hizbul Shabaab）と名乗ったり、「2つの移民団の土地の民衆抵抗運動」（Popular Resistance Movement in the Land of the Two Migrations, PRM）と名乗ることもある。

(イ)概要

アル・シャバブは本来イスラム法廷会議(ICU)の若手強硬派の集まりで、米国などではイスラム法廷会議の過激派が分裂したものとみなされている。しかし、イスラム法廷会議とアル・シャバブの関係はそれほど明確なものではない。アル・シャバブはイスラム法廷会議がまだ健在の2004年の半ばに結成され、「イスラム教の敵」と戦う戦士が集まってできたものとされる。現在では米国国務省から「国外テロ集団」に指定されている。

イスラム教に基づく法体系シャリーアを第一の行動原則としている。例えば罪に対する罰が厳格であり、2008年10月には姦通を行ったとして13歳の少女が石打刑で処刑されたと伝えられている。(この少女は3人の男にレイプされた被害者であるとする報道もある。) また、2009年6月22日には、携帯電話を盗んだ罰として、若者4人の手足を片側ずつ切り落とすとする判決が出されたと報じられている。また、海賊行為にも批判的であり、2008

年 11 月にハラデレ沖で起きた大型タンカーに対する身代金要求事件に関して、死刑に相当する罪だとの声明を発表している。ただしソマリア暫定連邦政府は、アル・シャバブは海賊から武器や身代金の分け前を要求していると伝えている。

また、ソマリア国外のソマリ族居住地域を含めた統一運動を呼びかけている。ただしイスラム信仰で団結している組織とも言えず、ソマリ族の複雑な部族間関係の影響もあると言われている。2009 年 1 月にソマリア中南部からエチオピア軍が撤退したことにより、その支配地域を一気に広げたが、これにより闘争目標が失われて分裂する可能性も指摘されている。

アル・シャバブのメンバー、とりわけ幹部には非ソマリア出身の外国人が入っているとされており、ペルシャ湾岸諸国から来た者が多いと見られる。かつてのソマリア人によるイスラム勢力の活動と異なり、アル・シャバブは自爆攻撃を多用しており、これが外国からのメンバーの影響によるものとされている。国連の 2006 年の報告書によると、イスラム過激派の主な支援者は、イラン、リビア、エジプト、ペルシャ湾岸地域出身と見られている。特にエジプトはナイル川の扱いについて上流のエチオピアと対立関係にあり、ソマリア暫定連邦政府を支援するエチオピアの弱体化を狙っているものとみられる。報道でも、アル・シャバブの中心メンバーがエジプトおよびアラブ出身のジハード戦士であるとされることが多く、彼らがソマリ族に最新兵器と自爆攻撃の訓練をしていると伝えている。

ソマリア国外のソマリア人でアル・シャバブを支援する人も多い。その理由として、ソマリア南部をイスラム法廷会議が支配していた時期には治安が安定しておりそれに共鳴するというものだったり、単にアル・シャバブの実態を知らなかったりといったことが挙げられている。

(ロ)活動の歴史

アル・シャバブの幹部は、2006 年初頭にモガディシュで軍閥 (ARPCT) と戦った経験を持つ。その成り立ちはよく分かっていないが、古くからのメンバーは「ヒズブル・シャバブ」として 2004 年初頭に結成された組織だと語っている。アル・シャバブの指導者アブ・マンスールによると、アル・シャバブには外国からの参加者も多いという。イスラム法廷会議の暫定連邦政府・エチオピア連合軍に対する敗北がほぼ確定する 2006 年末までに、アル・シャバブの戦力は推定 3 千から 7 千の間で変化した。6 週間の基礎訓練コースを終了すると兵士として認められた。一部の者はさらにエリトリアに留学してゲリラ戦術と爆発物取扱について訓練を受けた。一部でアル・シャバブの資金源の一つはソマリア海賊であると主張されたが、国際海事機関東アフリカ支部はこれを否定している。

2006 年 6 月 10 日、イギリスの新聞ガーディアンは「西側からの救援者 4 名とテロ組織に反対するソマリ族 7 人以上が殺害された事件は、イスラム指導者アウエイス の下と見られるアデン・ハシ・ファラ が主導する無名の組織と関係があると見られる」と報じている。6 月 15 日、アデン・ハシ・ファラは、エリトリアからの武器援助を受けていると報じられた。7 月 26 日にもアル・シャバブの幹部の一人シェイカ・ムクター・ロボウ・マンズ

ール がエリトリアから武器を提供されたと語ったと伝えられている。

7月半ば、アデン・ハシ・ファラはソマリ人戦士 720 名を選んで対イスラエルの義勇兵としてレバノンに派遣した。そのうちソマリアに帰還したのはわずか 80 名であった。9月にヒズボラのメンバー5名と共に 20 名が帰還した。その際、アデン・ハシ・ファラの兄弟が勤める送金会社、ダルサン・インターナショナル (Dalsan International) が 1000 万ドルの使途不明瞭な支出をして倒産した。その理由は「ICU 軍の指導者がモガディシュ軍閥 (ARPCT) と戦っていた 2006 年 6 月、ICU を助けるために大金を流用した」というものであった。

ソマリア暫定連邦政府がエチオピアの力を借りてモガディシュとキスマユを取り戻した直後の 2007 年 1 月 6 日、アル・シャバブの幹部らは逃走中だった。彼らは「逃散前のアル・シャバブのメンバーは 1000 人ほどいたが、今や武器はほとんど持っていない。それでもエチオピアと非イスラム政府に対するジハードを続けるべきだとする幹部を援助する人がいる」と語っている (なお「1000 人」は他の場面で語られた数よりも少ない)。

2007 年 1 月 19 日、ICU よりのウェブサイト、Qaadiya.com は、「イスラム法廷会議は改組され、『2つの移民団の土地の民衆抵抗運動』(PRM) となった」と報じた。「ソマリ族反政府運動 (Somali People's Insurgent Movement, SPIM)」、「ソマリ族抵抗運動 (Somali People's Resistance Movement, SPRM)」と報じられたこともある。1月24日には、シェイハ・アブディカディア (Sheikh Abdikadir) がバナディア地区の指導者についてと発表された。1月31日、アル・シャバブはアフリカ連合平和維持軍 がソマリアに来ることに對して、「ソマリアは諸君らが給料を稼ぐ場所ではない。死ぬ場所だ」との警告を行っている。2月9日、イスラム支持層が強いモガディシュ北部で、800人のソマリ人がアメリカ、エチオピア、ウガンダの国旗を焼き、国際連合平和維持活動のソマリア平和維持活動 (AMISOM) に従事するアフリカ連合と国際連合に抗議を行った。PRM の代表として覆面をした「アブディリサク (Abdirisak)」は、エチオピア軍の宿泊先は武力攻撃を受けることになるだろうとの警告を行った。2月28日、米国国務省はアル・シャバブを米国の移民国籍法 (INA) に定める「国外テロ組織」 (U.S. State Department list of Foreign Terrorist Organizations) と認定した。2008年2月のボサソでの爆破事件、2008年のハルゲイサで爆破事件があり、犯行声明は出されていないが、これがアル・シャバブによるものだとし非難声明が出されている。

2008年8月、アル・シャバブはソマリア南部の港湾都市キスマユで、多数の死者を伴う数日間の戦闘の結果、TFG系の勢力であるバーレ・アダン・シレ・ヒラーレ が率いる軍を破って勝利を収めた。キスマユは 2007 年 1 月から 1 年半ぶりにイスラム勢力の支配圏となった[38]。戦闘により避難した人々は 3 万 5 千人に上った。ヒラーレの軍が撤退した後、アル・シャバブはキスマユの治安を安定させるため、地元武装集団に対して武装解除を進めていった。11月20日、米国財務省はアル・シャバブの幹部 3 名の米国資産凍結を発表した。2008 年後半までにアル・シャバブは首都モガディシュの一部を除き、ソマリア南部の大部

分を掌握した。これはかつてのイスラム法廷連合が支配した領域よりも広い。

2009年1月26日にはエチオピア軍が撤退した数時間後に、ソマリア暫定議会があるソマリア南部の都市バイドアを占領した。2009年2月22日にはモガディシュのアフリカ連合軍基地への自動車自爆テロを行い、ブルンジの平和維持軍の少なくとも6名が死亡した。

5月17日にはモガディシュ北部のジョハールを支配した。その後、ユニセフの施設から略奪を行っている。6月18日にもソマリア中部ベレドウェインのホテルで治安長官のアデンを含む20名が自動車自爆テロで死亡し、アル・シャバブからの犯行声明が出されている。6月20日にはアル・シャバブを中心とする反政府組織が首都モガディシュの大統領官邸を包囲しているとして、大統領により非常事態宣言が出され、ケニア、ジブチ、エチオピア、イエメンなどに24時間以内に軍を派遣するよう要請が出された。

その後もアル・シャバブは活発な活動を続け、8月にオーストラリア陸軍施設へのテロを計画、9月にはウェブ上で全世界に募兵を呼びかけ、11月に対ユダヤ人・イスラエル作戦用の特殊部隊「アル・クッズ旅団」を創設し、2010年に入ると1月にアルカーイダとの連帯を表明、その後も数件の爆弾テロに関与を疑われるなど、その活動範囲は広がりつつある。また宗教的活動にもひきつづき熱心さを見せ、2009年後半にはムスリムにふさわしくないとして金歯・銀歯はてはブラジャーまでも回収、2010年4月に学校で始業などのベルを鳴らすことは「キリスト教のしるし」として禁止している。

ソマリアにおけるもうひとつのイスラム勢力ヒズブル・イスラムとアル・シャバブは協力関係にあったが、アル・シャバブは思想的に強硬派であり、2009年9月上旬にキスマヨでアル・シャバブ系以外のラジオ局が焼き払われるという事件が起き、緊張が高まった。2009年9月下旬、ヒズブル・イスラムとアル・シャバブは互いに宣戦を布告した。2009年10月上旬にはキスマヨ近郊でアル・シャバブとの戦闘が発生、その後戦闘は各地に飛び火し、アル・シャバブはヒズブル・イスラムの勢力圏を三つに分断しつづけている。2010年2月には、ヒズブル・イスラム側の部将ハッサン・トゥルキーがアル・シャバブへ合流する[57]など、現在も混沌とした状況は終息していない。

トゥルキーの移籍によって軍事バランスが大きく崩れたことから、2010年度に入ってアル・シャバブは大規模な軍事攻勢に出た。ヒズブル・イスラムの支配地であったゲド州やヒラーン州を次々に攻略し、ついに12月20日にはヒズブル・イスラム議長アウエイスから全面降伏の声明を引き出したが、それが実現されるかどうかは不透明であり、今後は暫定政府やソマリランド、プントランドなど、より安定した政府とアル・シャバブが並び立つことになる。

(ハ)モガディシオ撤退

2011年7月から8月にかけて、モガディシオ市内においてアフリカ連合派遣部隊と交戦するも、市内からの撤退を余儀なくされる。また、同年10月にはソマリア南部へケニア軍の陸上部隊が進出（ケニア軍のソマリア侵攻の項参照）したほか翌月にはケニア軍機が爆撃を実施。さらに、同じ時期よりエチオピア国境ではエチオピア軍の侵攻が盛んに報じら

れるなど、国際的な包囲網が敷かれるようになった。一方、リビアのカダフィ政権が崩壊して支援が途絶えたことも打撃となった。

2012年2月、アル・シャバブがアルカーイダへ合流するメッセージがアル・シャハブのサイトに掲載される。サイトには、併せてアルカーイダの指導者ザワヒリのビデオ声明も掲載している。

(二)キスマユ撤退

2012年9月、ケニア軍を主力とするアフリカ連合部隊は、南部の港湾都市であるキスマユを包囲。9月28日には海岸への揚陸戦を実施し総攻撃の体制を採った。これに対してアル・シャバブ交戦せず9月29日に撤退を開始。掌握下にあった最後の大都市を失った。以後はブラバなどが拠点となっている。

2013年1月、ブラ・マレルにおいて、フランス軍は拉致されていたフランス兵1人の救出作戦を行うが失敗。兵士は死亡し、救出部隊は1人が死亡、1人が捕虜となった。アル・シャバブ側は17人が死亡。

2013年9月21日、隣国ケニアの首都ナイロビの商業施設で、39人が死亡する襲撃事件があり、アル・シャバブが犯行声明を出している。

2013年10月5日、ブラバの拠点が国籍不明の武装ヘリコプターの攻撃を受けるが、アル・シャバブはこれを撃退。

2014年9月5日、米国国防総省は、9月1日に実施した対テロ作戦において、指導者アハマド・アブディ・アウ・ムハンマドを殺害したと発表した。

9. マグレブ諸国のアルカーイダ (アルジェリア)

イスラム・マグリブ諸国のアルカーイダ機構 (アラビア語 : *المغرب ببلاد في القاعدة تنظيم*、*الإسلامي*、翻字 : *Tanzīm al-Qā'idah fī Bilād al-Maghrib al-Islāmī*、英語 : *Al-Qaeda in the Islamic Maghreb*、略称 : *AQIM*) は、アルジェリアを中心にマグリブ諸国で活動しているサラフィー・ジハード主義組織。

(イ)概要

2006年までは「説教と戦闘の為のサラフィー主義者集団」(アラビア語 : *الجماعة الإسلامية للدعوة والقتال*、翻字 : *al-Jamā'ah as-Salafīyyah lid-Da'wah wal-Qitāl*、フランス語 : *Groupe Salafiste pour la Prédication et le Combat*、略称 : *GSPC*、サラフィスト・グループ) と名乗っていたが、ウサーマ・ビン・ラーディンに忠誠を表明。2007年に現在の組織へ改組し、アルカーイダとの一体化を強調している。イスラム国家樹立を目指して、アルジェリア政府転覆工作を続け、スペイン・フランス・米国を名指しで攻撃目標としており、西側各国から「国際テロ組織」に指定されている。現在のリーダーはアブー・ムスアブ・アブドゥルワドゥード。

(ロ)活動

(改組前)

1998年9月、アルジェリアのタクフィール主義（英語版）思想を掲げる「武装イスラム集団」（GIA）に不満を抱く分子がハサン・ハッターブ（英語版）（Hassan Hattab）を中心にアルジェリア北部のカビリ（英語版）地方にて、サラフィー・ジハード主義思想を掲げる「説教と戦闘の為のサラフィー主義者集団」を設立した。設立時にはウサーマ・ビン＝ラーディンが関与したとされ、アルジェリア国内などで多くのテロ攻撃を繰り返している。政府や軍の要人、施設などが主な対象であるが、2003年2月には外国人32人を誘拐している。同年9月、ハサン・ハッターブが更迭され、ナビル・サハラウィ（Nabil Sahraoui）がリーダーになると、アルカーイダとの結びつきを深め、俗に「アルカーイダの後方基地」とも言われるようになった。2004年6月20日、ナビル・サハラウィがアルジェリア軍に射殺されると、アブー・ムサブ・アブドゥルワドゥードがリーダーに就任した。2006年、ハサン・ハッターブはアルジェリア政府に投降して脱退、一方、アブドゥルワドゥードはアイマン・ザワヒリーとの関係を深め、2007年にAQIMに改組した。同年4月にはアルジェリア首相公邸をターゲットに自動車爆弾テロを、12月にはアルジェリア最高裁判所と国際連合難民高等弁務官事務所・国連事務所をターゲットに同時自動車爆弾テロを引き起こし、首都アルジェでともに多数の死者を出した。

アルジェリア国境を越え、近隣国においても麻薬密売や恐喝、資金洗浄で組織の資金を確保し、マリやニジェールでもトゥアレグのイスラム主義組織「アンサール・アッ＝ディーン」と連携して活動を拡大している。イギリス、イタリアなど欧州のアルジェリア人社会にも多くの活動家を抱えている。イラクのアブー・ムサブ・アッ＝ザルカーウィーのグループ「イラクの聖戦アル＝カーイダ組織」とも関係を構築している。

サヘル地方がイスラム過激派のリクルート地帯と化していることから、アメリカ主導で近隣国は共同の「汎サヘル構想」（PSI）（2004年からは「トランス・サハラ対テロ作戦構想」に移行）を立て、対テロ戦争の一環として2007年2月からサハラ/サヘル地方で「トランス・サハラにおける不朽の自由作戦（OEF-TS）」を実施し封じ込めを行っている。

（改組後）

2009年7月、中国のウルムチ市でムスリムのウイグル人が虐殺されるウイグル騒乱が発生、AQIMは中国政府への復讐を宣言している。

2011年1月、チュニジアのジャスミン革命では「チュニジアはシャリーアに基づくイスラム国家になるべきである」として反政府勢力を支持、ザイン・アル＝アービディーン・ベン＝アリー政権打倒の軍事支援を実施している。同年2月、リビア騒乱においても、反政府勢力への支援を宣言した[2]。リビアの最高指導者ムアンマル・アル＝カッザーフィーはAQIMの反カダフィ勢力[3]への介入を非難したが、10月20日に殺害されて内戦は終結した（ムアンマル・アル＝カッザーフィーの死）。

2012年、トンブクトゥへ進出。市内において世界遺産の遺跡を破壊するとともに、カダフィ大佐がトンブクトゥに所有していた住居を占拠。マリ北部における活動拠点の一つとした。

2012年12月、組織内の対立から指導者の1人、後にアルジェリア人質事件を起こすモフタール・ベルモフタールがAQIMを離脱。2013年1月、フランスがマリの武装組織に対して行った軍事介入（セルヴァル作戦）により、打撃を受けることとなった。

10. アル＝ヌスラ戦線（シリア）

アル＝ヌスラ戦線（アラビア語: الشام لأهل النصر جبهة）は、シリアで活動するサラフィー・ジハード主義の反政府武装組織。シリア、レバノンにおけるアルカーイダの下部組織である。シリア騒乱における一連の軍事行動において反政府側に立つ一組織。組織の正式名称は「アッ＝シャームの民のアンル＝ヌスラ戦線」などと訳されている。

戦線は結成を2012年1月23日、シリア騒乱最中としている。それ以来、シリアで「最も攻撃的で成果をあげた」あるいは「もっとも効果的な反乱軍のひとつ」などと形容されている。アサド政権からは数々のテロの首謀者として非難される一方で、国連、米国、オーストラリア、イギリス、トルコから「テロ組織」と認定されている。

2013年4月、「イラクとシャームのイスラム国（ISIS）」のリーダーは、アル＝ヌスラ戦線は「イスラム国 ISIS」のシリア支部であると発表。対してアル＝ヌスラ戦線のリーダー、アブー・ムハンマド・アル＝ジャウラニ（Abu Mohammad al-Jawlani）はいかなる合併も行われていないとしてそれを否定、組織はアルカーイダのリーダー、アイマン・ザワヒリーに忠誠を誓っていると断言した。しかしながら2013年5月、アル＝ヌスラ戦線から「イスラム国 ISIS」に同調する一派が「イラクとシャームのイスラム国」を名乗り活動を始めた。一方で2013年11月頃よりシリア国内のメンバー、ネット上の支持者達は「アル＝ヌスラ戦線」の代わりに、あるいは併記する形で *Tanzim Qa'edat Al-Jihad fi Bilad Al-Sham* や「シリアのアルカーイダ」という名称の入ったバナーや旗、チラシなどを使い始めた。

(イ)概要

アサド政権に対する戦いを聖戦と位置づけ、外国からの参加者を集めて勢力を拡大。シリア国内の反政府勢力の中心的存在である自由シリア軍と連携を取りつつも、IEDを使用した自爆攻撃を中心に武力闘争を継続。

一般にスンニー派イスラム主義ムジャヒディーンで構成された反政府組織として扱われる。アサド政権の転覆を目的とし、シャリーアに基づくパン＝イスラム主義国家の成立、イスラム帝国の復権を目指している。そして全てのシリア人は現シリア政府に対する戦争に参加するようと呼びかけている。戦線のハサカ県地域の指揮官、アブー・アフメド（Abu Ahmed）はUAEの新聞のインタビューに対し組織の目的はアサドの退陣とシャリーアに基づいた国家の成立であると明言した。

2014年、戦線のシャリーア事務官、ダル・サーミ・アル・オライディ（Dr Sami Al Oraid）は戦線がアブー・ムサブ・アル＝スリ（Abu Musab al-Suri）の影響を受けていることを明

らかにした。戦線の基本戦略はアブー・ムサブの示した地元のムスリムコミュニティの心をつかむための 4 つの指針に由来している。すなわち、人々にサービスを提供すること、過激派と認識されることを避けること、コミュニティや他の反乱組織との強固な関係を維持すること、政権との戦闘だけに集中すること、の 4 つである。

一方で戦線のメンバーがシリア国内のスニー派以外のイスラム教徒（アラウィー派など）を攻撃したとして告発されている。さらに一部のメンバーはアメリカとイスラエルをイスラムの敵として非難、そして欧米諸国からのシリアへの干渉に対し警告を発している。これらの行動はアブー・ムサブの示すガイドラインに反するもので、シリア人のメンバーたちは戦線が戦っているのはアサド政権であり、欧米諸国を攻撃するべきではないと主張している。一部の評論家や外交官は、世俗勢力との共闘や外国人メンバーの意思、期待の影響から戦線の目的がアサド政権の転覆よりもイラク、アンバール県からシリア東部の砂漠地域にまたがる支配圏の確立へと広がりつつあるのではないかと見ている。

2012 年 12 月、アメリカは戦線がイラクのアルカイダ組織から支援を受けていると告発。2013 年 4 月、イラクのアルカイダのリーダーはこのつながりを認める声明をだしている。

(ロ)歴史

シンクタンクのキリアム（Quilliam）は、戦線のメンバーの大半はイラクにおいて米軍との戦闘を繰り返していたアブー・ムサブ・アッ＝ザルカーウィーのイスラム主義ネットワークに参加していたシリア人だと報告している。多くのシリア人は米軍の撤退後もイラクにとどまったが 2011 年シリア騒乱が起これると「イスラム国 ISIS」はシリア人ムジャヒディーン、そしてイラク人のゲリラ戦エキスパートをシリアに送り込んだ。2011 年 10 月、2012 年 1 月と複数回にわたる会合がリーフ・ディマシュクとホムスにて行われ、グループの目標が定められた。

2012 年 1 月 24 日にアル＝ヌスラ戦線として最初の声明が発表され、その中でシリア政府への徹底抗戦が呼びかけられた。のちに 2 月のアレッポの爆弾事件、1 月のアルミダンの爆弾事件、3 月のダマスカスの爆弾事件、ジャーナリスト、ムハンマド・アル＝サイード（Mohammed al-Saeed）の殺害についてそれぞれ犯行声明をだした。

イラクの外相ホシャル・ジバリ（Hoshyar Zebari）は ISIS のメンバーがアル＝ヌスラ戦線に参加するためにかつて彼らが武器や支援を受けたシリアへと向かったと語っている。現在彼らがシリア国内で最も訓練と経験を積んだ戦士となっている。かれらの攻撃性はイスラム教の定めた祝日にさえ休戦を拒んだことからもうかがえる。

アメリカの諜報部は早い段階からアレッポとダマスカスの爆弾事件の犯人としてアルカイダを疑っていたと伝えられている。イラク内相代理は 2 月前半、イラクから武器とイスラム主義の民兵が続々とシリア入りしていると語った。戦線はシリアの首都ダマスカスでの自爆テロの実行犯としてアル＝ザフラ・アル＝ズバイディ（al-Zahra al-Zubaydi）〔訳注 2〕の名をあげた[37]。亡命したシリアの元外交官ナワフ・アル＝ファレス（Nawaf al-Fares）はデイリー・テレグラフのインタビューに対し、かつてファレス自身が手引きし

米軍と戦うためにイラクに送り込んだジハーディストたちが、今は反乱軍を非難する口実を得るためにシリア政府からの直接の命令でシリア市民に対して自爆攻撃を行っていると言った。

2013年5月、アル＝ヌスラのメンバーがトルコで拘束された。後にサリンを製造する目的で科学薬品を集めていたとして告発された。

(ハ)外国からの支援

少なくともアラブ地域の一政府が、カタールがアル＝ヌスラ戦線を支援していると非難している。米国政府は遅くとも2013年、早ければ2011年の騒乱初期の段階からシリアの反乱組織に武器を送っていた。これらの武器はアル＝ヌスラやISISといった過激派組織の手に渡ったと伝えられている。

アル＝ヌスラはまた外国のメンバーからも物質的な支援を受けている。これらの支援は基本的に彼らとのネットワークのつよいヨーロッパやアラブ地域からのものが大部分を占める。しかし2013年11月、アメリカの国籍を持つ物や、永住権を持つ住民がアル＝ヌスラの活動に加わった、あるいは加わろうとしたケースが2013年だけで6件あると公表された。

11、ボコ・ハラム (ナイジェリア)

ボコ・ハラム (Boko Haram) は、ナイジェリアのサラフィー・ジハード主義組織。正式な名称は「宣教及びジハードを手にしたスンニ派イスラム教徒としてふさわしき者たち」(アラビア語: **الجهاد لدعوة السنة اهل جماعة** Jamā'at Ahl as-Sunnah lid-da'wa wal-Jihād) という。

Boko はハウサ語で「西洋式の非イスラム教育」を意味し、Haram とはアラビア語で「罪」の意味である。つまり Boko Haram とは「西洋の教育は罪」という意味となる[2]。ナイジェリア北部の各州にシャリーアの導入を目指して武装闘争を展開している。「ナイジェリアのタリバン」と呼ばれ]。

(イ)概要

ボコ・ハラムは西洋式教育だけでなく西洋文明、現代科学、特にダーウィン主義を攻撃している。創設者はモハメド・ユスフ (英語版) (Mohammed Yusuf)。現在の指導者はアブバカル・シェカウ (英語版) である。主要メンバーには、Mallam Sanni Umaru がいる。2014年、ナイジェリア秘密警察の広報官は、本物のアブバカル・シェカウは、2003年の時点で既に死亡しており、死亡後、複数の人物が名乗ってきたことを指摘。組織内でアブバカル・シェカウの名前が1人歩きし、指導者のブランドと化していることを示唆している。なお、ボコ・ハラムのビデオにて、アブバカル・シェカウを演じていた戦闘員の1人は、2014年、ボルノ州内の戦闘により死亡している。

(ロ)歴史

(2012年まで)

前身組織は、1990年代中頃に設立されたイスラム教の学習グループとされる。ボコ・ハラムは、2002年にナイジェリア北部のマイドゥグリで結成された。2004年にボコ・ハラムはヨベ州に本部を移した。ニジェールとの国境付近に設立した軍事訓練キャンプを「アフガニスタン」と名づけ、そこから警察署の襲撃などを繰り返した。ボコ・ハラムにはチャドなどから来た民兵も合流している。

2009年、ナイジェリア警察はボコ・ハラムの摘発に乗り出しバウチ州で幹部数名を逮捕、7月には治安部隊とボコ・ハラムの間でバウチ州、ヨベ州、カノ州、カツィナ州において大規模な戦闘が行われ、700人を越える死者が出た。リーダーのモハメド・ユスフはナイジェリアの治安当局に逮捕され、収監中に脱走を図り射殺された。39歳であった。以降はシェカウがリーダーを名乗ることとなる。

2010年にはボルノ州での暗殺、バウチ州の刑務所襲撃（700人以上の受刑者が結果的に脱獄した）、グッドラック・ジョナサンが大統領に就任すると首都アブジャのナイジェリア軍兵舎敷地内の市場での爆弾テロ、クリスマスイブにプラトー州でキリスト教徒を狙った連続爆破テロなどを起こした。

2011年6月にアブジャで起こった警察本部駐車場での自爆テロ事件（2人が死亡）でも犯行声明を出している。

2012年1月6日北東部アダマワ州の州都ヨラで教会と美容院を襲撃し、11人を殺害した。さらに同日北東部ヨベ州で警察と銃撃戦を展開し、警察官2人が死亡した。同年2月15日夜、コギ州の刑務所が襲撃を受け、看守1人が殺害、受刑者119人が脱走する事件が発生したが、後日、この事件の犯行声明を出している。

(2013年)

2013年5月14日、ナイジェリアのグッドラック・ジョナサン大統領は、ボコ・ハラムたちの攻撃は宣戦布告に該当するとして「テロリストの反乱」に対処するため、ボルノ州、ヨベ州、アダマワ州の3つの州に対して非常事態宣言を発令した。2013年を通じて、政府軍とボコ・ハラムの戦闘は続き、隣国のニジェール側に3万7,000人以上の避難民が流出した。また同年11月13日、アメリカ政府は、ボコ・ハラムとアンサル（派生組織）を、テロ組織に指定した。同年7月6日、ヨベ州マムドの寄宿学校が襲撃され、生徒ら42人が死亡した（Yobe State school shooting）。9月17日、ボルノ州ベニシェイクで市民が襲撃され少なくとも87人が死亡した[12]。9月25日から26日にかけて、カメルーン国境に近いボルノ州の村が襲撃され、民間人27人が死亡した。9月29日にはヨベ州の農業大学の学生寮に武装集団が押し入り銃を乱射し40人の学生が死亡する事件が発生（Gujba college massacre）、ナイジェリア軍報道官は、この事件をボコ・ハラムの犯行だと非難した。

(2014年)

2014年2月、ボルノ州のキリスト教徒が多く住む村が襲撃され、100人以上が犠牲となった。

2014年4月、ボルノ州の学生寮を襲撃し女子生徒240人が拉致（ナイジェリア生徒拉致

事件)。女子生徒らを「奴隷として売り飛ばす」との犯行声明がだされる。

2014年5月、ボルノ州の町を襲撃、少なくとも125人を殺害。

5月29日、グッドラック・ジョナサン大統領は、前月の生徒拉致事件を念頭にボコ・ハラムに対し、対テロ全面戦争を行う決意を表明したが、この日以降も断続的に集落が襲われ多くの住民が殺害された。

12. アンサール (ナイジェリア)

アンサール (Ansaru) は、ナイジェリアを拠点とするイスラム系武装組織。ナイジェリア北部を拠点としている。主要メンバーは、Abu Usmatul al-Ansari 及び Abu Jafa' ar (スポークスマン) である。ナイジェリア国内で展開するイスラム系武装組織、ボコ・ハラムから分派して誕生した組織とされる。

2012年1月にインターネットサイトを通じて自らの主張と活動状況を周知するようになった。その後は、大きな動きは見せなかったが、2012年12月、2013年1月にナイジェリア国内で発生した外国人襲撃、誘拐事件、2013年2月にカメルーンで発生したフランス人観光客誘拐事件において犯行声明を出した。これら事件を通じた要求等は不明[1]。

13. ウズベキスタン・イスラム運動

ウズベキスタン・イスラム運動 (Islamic Movement of Uzbekistan, IMU) (ウズベク語: Ўзбекистон Исломий Ҳаракати / O'zbekiston islomiy harakati) は、1998年に創設されたイスラム軍事組織。

(イ) 沿革

1998年、イスラム軍事組織の「ウズベキスタン・イスラム運動」がアフガニスタン・カブールで結成される。創設者は原理主義者のタヒル・ユルダシェフとソ連の落下傘部隊出身のジュマ・ナマンガニ。ともにフェルガナ盆地出身のウズベク人。イスラム・カリモフ政権打倒と、シャリーアに基づくイスラム国家樹立が目標で、政治部門はユルダシェフが、軍事部門はナマンガニが指導した。

IMUは、タジキスタン内戦 (1992年-1997年) にタジキスタン・イスラム復興党の信任を得て参加、この時期、ペシャワールでビン＝ラーディンとも繋がる。

タジキスタンやタリバン支配下の北アフガニスタンをベースに、1999年から2000年にキルギス南部、及び、ウズベキスタン政府軍への攻撃を続けた。

2001年以降は、北部同盟及びアメリカ軍との戦闘で敗北を喫し、ナマンガニは戦死した。ユルダシェフは残党とともにパキスタンの連邦直轄部族地域にあるワズィーリスターンに逃げ込み、パキスタン政府転覆の戦いを続けた。

ユルダシェフはタジキスタン・イスラム運動 (Islamic Movement of Tajikistan, IMT) の名も用いていたが、2002年以降アルカーイダとの関係を深め、中央アジア・イスラム運動 (Islamic Movement of Central Asia, IMCA) の名でも運動を開始、支部に、トルキスタン・イスラム運動 (Islamic Movement of Turkestan, IMT) もある。しかし、IMUもこれらの組

織もワズィーリスターン以外での現在の勢力は不明である。

ユルダシェフは、2009年8月27日、南ワズィーリスターン・カニゴラムで無人航空機の攻撃を受け死亡した[1]。そして、ユルダシェフの後継者としてウスマン・アディール（ロシア語: Усман Адил、英語: Abu Usman Adil）が指名され、さらにその後ウスマン・ガズィ（ロシア語: Усман Гази、英語: Usman Ghazi）が後継者として指名された。

2011年4月、2012年3月26日、2012年4月7日にアフガニスタンのIMUはISAFの攻撃を受け、後継指導者はいずれも死亡した。

2014年6月8日のカラチの国際空港襲撃事件の犯行の関与を認めて、パキスタン・タリバン運動と協力を主張。

14. 西アフリカ統一聖戦運動（マリ）

「西アフリカ統一聖戦運動」(MUJAO)は、「イスラム・マグレブ諸国のアルカイダ」(AQIM)関連組織の「覆面旅団」内における、主導権争い及び資金の分配などに起因する内紛から発生したとされる。指導者はアハマド・ウルド・アメル（別名アハマド・アル・ティルムジ）とみられる。2011年10月にアルジェリア南西部のティンドゥフ県の西サハラ難民キャンプで、人道支援団体の外国人メンバー3人を誘拐したことから、その存在が知られるようになった。

MUJAOは、AQIM及び「アンサール・ディーン」(AD)とともにマリ北部地域の占拠及び支配を進め、2012年6月、ガオ市を拠点としたが、2013年1月のフランス軍などの軍事介入後は、イフォガス山地などに撤退した。

2013年8月、AQIM元幹部ベルモフタルとされる者は、「覆面旅団」及びMUJAOが解散し、新組織「アル・ムラービトゥーン」を結成したと発表した。

15. アンサール・アル・スンナ（イラク）

アンサール・アッ=スンナ（アラビア語: السنة أنصار ج يش、翻字: Ğayš Anṣār as-Sunna）は、イラクのサラフィー・ジハード主義組織。イラク北東部のハラブジャ（Halabja）近郊の山岳地帯を拠点とするクルド人武装組織であるアンサール・アル=イスラム（Ansar al-Islam）からの分派勢力によって、2003年9月に設立された。スンナ派のアラブ人なども加わっている。イラク中部・北部を拠点としている。イラク戦争において、イラク駐留軍やイラク治安部隊、及びその関係者である疑いのある者、国籍を問わず米国に友好的でイラク戦争に協力する一般市民や、ネパールの出稼ぎ労働者、警備員、警察官を拉致し、アメリカ軍などの撤退を要求する。もし要求が拒絶された場合、生きたままの斬首や頭部を銃撃するなどして、録画したその模様を見せしめにインターネット上で公開し、路上などに遺体を放置する。2005年3月には、邦人を拉致する事件が起きた。アブー・ムサブ・アッ=ザルカーウィーの「イラクの聖戦アル=カーイダ組織」との密接な繋がりが指

摘されてきたが、アンサール・アル・スンナ軍がアルカーイダを敵視する内容の手紙を米軍が入手しており、アルカーイダ系の武装組織と見られていた「イラクの聖戦アルカーイダ組織」（現「イスラム国」との間で、何らかの衝突があったものと考えられている。

16. アブドラ・アッザム旅団（レバノン）

「アブドラ・アッザム旅団」（AAB）は、2004年以降に結成されたとみられるスンニ派武装組織であり、レバノンとアラビア半島に「大隊」（支部）が存在する。レバノンの「ジャヤード・アル・ジャッラーハ大隊」は、2009年2月に発生したイスラエルへのロケット弾攻撃に関して犯行を自認した。

アブドラ・アッザムとは、「アルカーイダ」前指導者ビン・ラディンにも影響を与えたパレスチナ人イスラム学者であり、その著作や声明は、今なおイスラム過激組織等に大きな影響を与えている。

最高指導者は、サレハ・アル・カラアウィとされる。カラアウィは、自身が過去、「イラクのアルカイダ」（AQI）に所属していたが、同指導者アブ・ムサブ・アル・ザルカウィ（2006年6月死亡）の指示を受け、AQIの活動をイラク国外にも拡大すべく、AABを立ち上げたと述べている。

AABは、2010年7月に中東のホルムズ海峡で起きた我が国企業運航の原油タンカーに対する爆弾攻撃で犯行を認めたほか、レバノン領内からイスラエルにロケット弾攻撃を行うなどしている。なお、AABが発出した声明に添付されていた画像の中のタンカーが、被害を受けたタンカーとは異なることから、同声明の信ぴょう性の判断は困難であるとの指摘もある。

また、AABは、2012年6月、シリアの反体制派に対する支援を要求する声明を発出したほか、同組織のメンバーを名のる者が、2013年11月19日に発生した在バイルート・イラン大使館を標的とした自爆テロ（同大使館員1人を含む23人が死亡）に関して、犯行声明を発出した。

17. アンサール・アッ=ディーン（マリ）

アンサール・アッ=ディーン（アラビア語：الدین أنصار、翻字：Anṣār ad-Dīn）は、マリ共和国のサラフィー・ジハード主義組織。マリ共和国を活動拠点とし、同国北部を占拠している。同地域にシャリーア（イスラーム法）を基にした新たな国家を樹立する為、2012年に組織されたとされる。指導者はイヤド・アグ・ガリー。

2012年1月、マリの北部各州（アザワド）のトゥアレグ人の反政府武装組織「アザワド解放民族運動（英語版）」（MNLA）の戦闘（en:Battle of Menaka・en:Battle of Tessalit）に呼応し、独立を求めて en:Battle of Aguelhok・en:Battle of Kidal で蜂起した。

4月6日にはアザワド解放民族運動（MNLA）とアンサール・アッ=ディーンが北部三

州（アザワド）を制圧し、一方的にアザワド独立宣言を発表した。イスラム宗教歌（ナシード）以外の音楽を禁止し、女性にはベールの着用を強制している。

6月、アンサル・ディーンとイスラム武装勢力西アフリカ統一聖戦運動（英語版）(MOJWA)とイスラーム・マグリブのアル＝カーイダ機構(AQIM)は、ガオの戦い（6月26日 - 6月27日）でガオを陥落させ、MNLAは駆逐された。

7月30日には、ユネスコが同月28日に「危機にさらされている世界遺産（危機遺産）」リストへ登録したばかりの世界遺産都市トンブクトゥにあるイスラム指導者の墓を、偶像崇拜の禁止を理由に破壊した。これまでも3つの墓を破壊しており、トンブクトゥには残り16の墓地や霊廟があるが、アンサール・アッ＝ディーンの広報担当者は「全ての墓を破壊し尽くす」としている。

2013年1月11日、マリ国内のイスラム勢力に対応するため、フランスが軍事介入を実施（セルヴァル作戦）。これを契機として政府軍との衝突が激化。1月13日には中部の都市コンナ（英語版）の攻防戦（コンナの戦い）にて有力指導者の一人、アブデル・コジャク・クリム（Abdel 'Kojak' Krim）が死亡したと報じられた。1月14日、ディアバリーの戦い。1月16日、アルジェリアのイリジ県イナメナスにある天然ガス関連施設でアルジェリア人質事件が起こった。

主要メンバーは、イヤド・アグ・ガリー、オマル・ハマハ（Omar Ould Hamaha）、アブデル・コジャク・クリム（Abdel 'Kojak' Krim）、モフタール・ベル＝モフタール

18. アンサール・バイト・アル・マクディス（シナイ半島）

「アンサール・バイト・アル・マクディス」は、シナイ半島を拠点とするイスラム過激組織であり、2011年頃から活動が確認されている。勢力は約700人から約1,000人とも推定される。イスラエルの打倒などを活動目標に掲げて、ロケット弾攻撃やイスラエル向けの天然ガス・パイプラインの爆破などを実行した。2013年7月のエジプト・ムルシー政権崩壊後は、同国治安当局を標的としたテロを活発化させたとみられ、同年9月5日にカイロ市で発生した同国内相を標的とした爆弾による暗殺未遂事件（21人負傷）や、同年10月19日にイスマイリヤ市で発生した軍情報機関施設を標的とした爆弾テロ（6人負傷）、同年11月17日にカイロ市で発生した同国内務省職員殺害事件などに関して、犯行声明を発売した。なお、バイト・アル・マクディスとは、エルサレムを指している。

19. ラシュカレトイバ（パキスタン～カシミール地方）

ラシュカレ＝トイバ（ウルドゥー語：لشکرِ طیبہ لشکر・翻字：laškar-ě tayyiba）は、南アジアのイスラム主義組織。インド・パキスタンの係争地域であるカシミール地方の分離独立を掲げ南アジア地域で活動している。Lashkarは「軍隊」を意味する語、Toibaはアラビア語で「よい」という意味があるTayyibの派生語であり、ラシュカレトイバとは「敬虔な者の軍隊」を意味すると説明される。

ハーフィズ・ムハンマド・サイード (Hafiz Muhammad Said) が、マルカズ・ウッ=ダウア・ワル=イルシャード (宗教・社会保障研究センター) の軍事部門として設立した。本部はパキスタンのラホール近郊の町ムリドケー (Muridke 座標: 北緯 31.795279 度 東経 74.251163 度) にあり、パキスタン領カシミール (アーザード・カシミール) に訓練施設を有するとされる。

母体であるマルカズ・ウッ=ダウア・ワル=イルシャード (マルカズ) は、ウサーマ・ビン=ラーディンの師匠であるアブドゥッラー・アッザームの影響の下、1989 年に創設された。ビン=ラーディンは、この組織のスポンサーとなり、ラシュカレトイバもアルカーイダと関係があるとされている。

ラシュカレトイバの構成員は、本名を隠し、偽名で活動している。ビン=ラーディンは、彼らを「シェイフ・アル・アブドゥッラー」と呼んでいる。9 月 11 日のテロ事件後、ラシュカレトイバの在米資産は凍結され、イギリスでは活動が禁止された (2000 年)。2001 年 12 月、米国政府は、ラシュカレトイバを「テロ組織」に指定した。2002 年 1 月、パキスタン政府も、ラシュカレトイバの活動を禁止し、資産を凍結した。ラシュカレトイバの活動禁止後、マルカズはジャマートウッ=ダウアに改称した。

パキスタンの News 紙によれば、ラシュカレトイバは、パキスタン国内とカシミールに 6 カ所の軍事キャンプを保有している。その外、パキスタン国内には、約 2,200 人の構成員が存在するという。

南アジア全域を支配するべく「イスラム帝国」建設を目指しており、かつてイスラム教徒のものであったのに、キリスト教の十字軍によって奪われたヨーロッパを、イスラムの手に奪い返す使命と、ユダヤ教徒とキリスト教徒に対するジハードは、すべてのイスラム教徒に与えられた義務であるとしている。

(出典：宮田律著『イスラム過激派・武闘派全書』、公安調査庁『国際テロリズム要覧』、Wikipedia 他)